

こゝなるのは如何なる名士も時にあはねば世に容れられぬのと同様である。
七月二十六日

■五寸の鍵にして開闔の門を制す……………(淮南子)

開闔は開闔のこゝ、淮南子の主術訓に斯ふ云ふておる、勢の利を得る者は持つ所甚だ小にして其存するこゝ甚だ大なり、守る所甚だ約にして制する所甚だ廣し、是の故に一圍の木は千鈞の屋を持し、五寸の鍵は開闔の門を制す云々
七月二十七日

■申きを負ひ遠きを涉れば地を擇ばずして休し、家しくして親老ゆれば祿を擇はずして仕ふ……………(孔子家語)

飢饉は食を擇ばす云ふのこゝ字義は違つて居つても意味に於ては變りはない苦しい時には事物を擇ぶ暇の無いのは人間の弱点であるが、此の弱点を順境に居る時に深く胸に持つて居れば苦しい思ひをするこゝが無い筈である。

七月二十八日

■楚王弓を失ふて楚人之を得る……………(孔子家語)

此の語も孔子家語から出たものである、家語の好生篇に斯ふ書いてある、楚の恭王が或日領内の山中へ獵に行かれたが、常々大切にして居つた弓を其途中で落して仕舞つた、そこで供の面々等は驚いて「是れは大變」に慌て、探ねに走らふこするに楚王は夫れを止めて「アイヤ、夫れには及ばぬ、此處は朕の領内ぢやから何うせ拾ふものは國內のものであらふ、楚王の落したものを楚の人民が拾へば夫れでよいぢや無いか、捨ておけく」に云はれたのでお供の者等は其大度を讃へた。

處が其事を傳へ聞いた孔子は同じく楚王の度量の大きなのを賞めるかと思ひの外嘆息して「ア、惜いこゝである、楚王は何んとして今少し大度で無いであらふ、實以て案外な方だ」に云ふから側に居つた門弟は「先生、楚王は大度な方

では御座いませんか、弓は武士の表道具として大切にすべきさへあるに落した
 のは楚王の特に秘藏せられて居つたものご聞き及びます。夫れほごのものを落
 しながら何うせ領内のもものが拾ふてあらふからご云ふので探ねさせもせん處は
 到底普通のものでは出来ずまい」ご聞く孔子はニタリご笑つて「そこちや
 楚王が左程まで大度の方なれば、人が弓を落した處で何うせ人が拾ふのだから
 捨ておけご何故云はれなんだらふ、それが何うも残念に思ふ、何も楚の字を付
 ける必要があるまいに」ご云ふた話がある、成程何んでも無いやふだが楚の一
 字があるご無いので同じ寛量でも非常に大きさが違ふ。

七月二十九日

■毛を吹いて疵を求むる………(漢 書)
 世には此の語を籤をついて「蛇を出す」ご云ふのご同じやうな意味に取つて
 居るものが多いやうだが、語源から云ふご毛の中までも吹きたづねて疵を求め

探すご云ふごになつておる云ひ換へれば苛察なごごである。

七月三十日

■號令汗の如し………(漢 書)
 號令ご云ふご大層に聞ゆるが、是れは單に言葉ご解釋しておく方が穩かだ、言
 葉は汗のやうなもので、一旦身体の外へ出した以上は再び元の通り收めるごご
 が出来無い、いや、取り消すごごが出来ないから口に任して無暗ご諛言ては取
 返しはつかぬご云ふごごである。

七月三十一日

■創業は易く守成は難し………(貞觀政要)
 事を創めるのは左程困難では無いが、是れを守つて成し遂げるごごは中々に六
 かしいご言へば此語のホンの字義だけである、だが事を創めるのは左程困難で
 は無いごごるか事を創めるまでは中々の困難だ、けれども是れを守成する上か

ら考へたなれば比較的仕易い。三解釋する方が穩當である、處が其守成。云ふこゝに就て周公が斯ふ言ふてある、小人を見るに父母は稼業に勤勞するも、其子は稼業の艱難を知らず、故に禍乱未だ嘗て安逸より生ぜずんばあらず云々、尤も此處に云ふ小人は人民のこゝであつて、業を初めた父毎は稼業に精を出して守つては居るが、其息子の代には相當の資産も出來て居るから息子は親の苦しみも知らず、稼業に心も入れない剩さへ、金子の有り難味も忘れて馬鹿費ひの爲めに金錢を湯水のやうに費ふから禍ひは其内から起らず云ふこゝもなく、延いて折角の資産を滅茶くにして仕舞ひ、遂には守成は出來無いくゝこゝになる。云ふ意味である賣家。唐様で書く三代目。云ふやうな譯になつて、門地高き名家、盛名恰き商家等が悲運没落の境愚に墮る例、古來より尠少でない、此戒むべき安逸に慣さへせねば守成は勿論發展の實を視る事も出來るのである。

八月一日

「人を以て言を廢せず……(論語)」
 「なーに、彼んな奴の云ふ事を信用出來るものか」云つた。云ふ人の名を聞いて話の筋道も耳に入れず頭から除ねつけて仕舞ふ人はよくあるものだが、そんな人は人を以て言を廢する方で甚だ宜しくない、智者に千慮の一失あれば愚者にまた千慮の一得があるものだ、何んな馬鹿者でも時に有利な言葉を吐くこゝがあるものだから、何人であらふこゝも語る處を一通り聞いた上で取捨の判別をつけるがよい。

八月二日

「三人龜を證して鼈と作す……(古諺)」
 何んにも知らぬ三人の者が、龜をば指して是れは泥鼈だ云へば鼈にして仕舞ふ、世の中は誠の説を稱へるものがあつても多數に壓せられて徹るものではない、尤も議會なんかの賛否にはそんなこゝはあるまいが、併し夫れでも黨派の

軌轢から時には一般國民の意に添はぬことでも多數黨の説に決せられることもある。

八月三日

■子を思ふ心の道の心もて、親につかへよ世の中の人……(源定信)
親に不孝をするものはあるが、我が實子に酷なくあたる親は無い、親として子の可愛のは全たく別のものだ、さすれば自分の親も自分を左程までして可愛かつて貰ひ、且つ育て、貰つたのであるから其親に對して義理にも不孝には出来ぬ筈である、ミ斯ふ考へては親を夢にも疎末に出来ぬ筈ではあるまいか。

八月四日

■衆口金を鑠し、積毀骨を銷す……(史記)
澤山な人が口を揃へて言ふたなれば其性の堅剛な金鐵ですら摺り鑠すほどの力があり、其者等が口々に偽つて毀れば假令父子兄弟の如きも互ひに疑ふて遂に

は才を交へ、骨肉之れが爲めに絶て仕舞ふやうなことになる云ふ意味で、讒言の恐るべきことを説いたのである。

八月五日

■剛毅木訥仁に近し……(論語)

●木を朴に書くものあるが木の方が正當である。
●悪氣無くて強いのは剛、氣性の強いのは毅だから剛毅云へば悪氣が無くて物事に屈せぬこと、夫れから木は質樸なこと、訥は遲鈍……云ふこと聊か語弊はあるけれどもマア、馬鹿正直なことだ、するに剛毅木訥な人間は云ふこと結局は頑丈な田舎老爺云ふやうなことになる、如何にも都會の地を遠く離れた山路なんかで出逢ふ田舎の爺さんは初見の者に對しても中々親切で、其行ひが仁に近いが其代り都人士のやうにお世辞は無い、いや、田舎でもお世辞のあるものは剛毅木訥では無い。

八月 六日

■魚水中にあつて其水なることを知らず……………(古 諺)
 魚は自分の住家とし、自分の生命の親として居る水を知らん云ふ可笑しいやうだが笑ひどころでは無い、人間にでも「お前は何うして生きて居るか」を聞けば十人が十人まで「飲食物のお蔭で生きて居る」を答へて空気に云ふことを口にするものは恐らく一人もあるまい、然も飲食物は半日口にせずとも生命には別條は無いが、空気を一時間ごころか十分間も吸はずに居つたなれば忽ち窒息は免がれ無い、それに何故飲食物を一として空気の有難味に氣が付かぬか云ふに一は物質として目に見え、是れを手に入れるには代るべき物質が要るに反し、一は無形で誰れ人も容易に得られるからである、それから今一つ無形なもので大切な人から受けた恩儀である、人は生計の爲めに物質を授けられし者を有りがたく思ふが、無形にうけた恩儀は空気に同じく忘れ易いものだ、

何うも夫れでは空気を忘れて飲食物を有り難がるやうなものである。
 八月 七日

■慧智出で、大偽あり……………(老子)
 未開の時代には人を詐すものは無いが、世の進むにつれて偽を云ふものが次第に多くなり、是れを防がふとして方法を設けるに偽を構はるものは更に巧妙な手段を以てするこゝとなる。
 八月 八日

■遠き慮りなければ近き憂あり……………(論語)
 人は目前のここのみを考へて、軽卒に事をして居つては何時不意に憂事が起るかも知れないから遠き慮りよりも近き慮りの方が大切だ。
 八月 九日

■王侯將相寧ろ種あらんや……………(史記)

壯士死せざれば即ち己まん、死せば即ち大名を擧げんのみ、王侯將相寧ろ種あらんや云ふのは此の語に就いての一句だが、男子は事に望むに是れくらいの意氣を持つて居らなければならぬ、元より一國の大臣も、陸海軍の大將も同じ人間である、小供の頃には腕伯したこどもあれば泣いたこどももある、學問をするにした處で最初は矢ッ張り平假名や片假名から習つたのだ、夫れが自分の力によつて次第に經上つたのだから、誰れだつても心次第で成れぬこどもは無い筈である。

八月十日

■水滴りて石穿つ………(鶴林玉露)
露のやうな雫でも絶えず落ちて居れば終には石に凹を穿つやうなこころなるから少しのものでも打ち捨て、おいては大きくなる云ふのは此の語の意味だが是れに就て鶴林玉露には次ぎのやうなこころが書いてある。

張乖岷云ふ人が崇陽云ふ土地の知事であつた時、或日金庫の中から出て来た一人の役人を何氣無く目をつけるこゝ、其鬢の處に一枚の錢が引ッ掛つてあるから呼び止めて調べて見るこゝ正しく金庫の中にあつた錢だから其都合を詰つて其役人を鞭打たした、處が其役人は大變に腹を立て、「惡氣でしたのでは無い、何時の間にか引ッ掛つてあつたんです、夫れも大金なれば兎も角、僅か一枚の錢で人に鞭を加へるこゝは餘りな仕方ではありませんか、左程まで人を苦しめるのなれば寧ろその事私しをお斬りなさい、併し私しを斬るだけの甲斐性がありますか」云ふ云ふ張は「馬鹿ッ、假令一枚の錢なりこも千日蓄たなれば千枚になるこゝが判らんか、繩を以て木を磨つて居つても木は斷てるものだ、水の滴りも石を穿つものである、左程まで汝の生命が不要なれば此場を去らせず斬つて捨て、やる」云ひも終らず椽から下りて一太刀に其首を斬つて捨て、其事を國主へ上申をして自殺して死んで仕舞つた、處が其後崇陽の人民等は張の

心掛ご勇ましい行ひを傳へて其氣風を養ひ、遂には其土地から出た軍卒は指揮官を凌ぎ、下役人は長官を越すほどの技量を以て長く傳へた云ふことである。

八月十一日

■香餌の下に必ず死魚あり……………(二三 略)

香餌は魚を釣る爲めの餌、死魚は釣られた魚のこも、此の語の意味は魚の釣りあけられるのは好餌の爲めである、人間だつて好餌に迷へば此通りだ。

八月十二日

■野人芹を献す……………(列 子)

宋の國に一人の百姓があつた、身には寒中だに漸く衣類を纏ふだけで、其他は身体を日に曝して暖つて居つたほごだから世の中の立派な家や、贅澤なこもは少しも知ら無い、其百姓或日自分の女房に云ふには「世の中に芹ほご旨いもの

は無いが、幸ひ澤山採つて来たから是れを殿様に献上したなれば定めて澤山な御褒美が頂けるだらふ」云ふて居るに偶々來合してあつた其在所の金持の主、夫れを聞いて「ア、コレノ一寸待て、成程お前の考へては道理なことだが昔斯んな話がある、野菜物の好きな人があつた、或時在所の郷士のお邸に寄合があつて出掛けて行くに話の出た内に食物の話があつたものだから其人は自慢半分野菜の旨いこと、其内にも日頃から自分が最も好きなものを並べて斯様くものは特に旨いこと云ふこと、其郷士は中々の食道樂を見ねて、左程旨いものなれば早速味ふて見やう云ふので下僕に云ひ付けて今聞いただけの品々を早速其場へ取り寄せさせ、それを味はふて見るに口を螯しそうなものやら、腹を痛めそうなものやら其他一つこして人間の口に出来そうなものは無いので追かに呆れて居れば列座の人等はドツツ笑ひ出したので其人は大恥をかいた云ふことだから、お前さんも芹は自分の好物だ云ふて殿様の

お口に合ふか合はぬか判つたものではない、いや、郷士に交際くらいの人でも夫れだもの、況して殿様にお前さん云へば月三鼈ほごの違ひもあることではあり、よくよく考へた上で無くは大恥くらいはよいが何んなお咎めを蒙らねばならぬかも判らんぜ」云ふた話がある。

八月十三日

■吞舟の魚も水を失へば螻蟻に制せられる……(莊子)

吞舟の魚は舟も呑めそうに見ゆる大きな魚、螻蟻は螻虫や蟻のこと。水の中では猛魚云はれ王魚云はれるほごの大魚も水を離れたなれば螻や蟻のやうな虫にすら自由にされる、人も身分や役目のある時には相當なものも其前では頭が上りかねるけれども、一旦其身分も落ち役目を取り上げられた後は卑しいものも見返りもせない、殷鑑遠からず嘗ては其權威一世を壓したほごの

海軍の某將官もシーメンス事件の發覺した以來は其權威全く地に落ちて世間の人は見かへるころか其顔に唾せんばかりでないか。

八月十四日

■足るを知るものは富む……(老子)

足るを知つて心に慾望無く、有るだけのものを失ひもせず夫れで満足して居れば心の内は寛なものであるけれども、有るが上にも尙望むものは財にあつても心の貧しいものである、そんなものは一生満足することなく終には事を誤まつて反つて思はぬ失敗をするものである。

八月十五日

■不義の富貴は浮べる雲……(古諺)

論語の子曰飯疏食、飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣、不義而富且貴於我如浮雲云ふのから出たもので、疏食は疎食、即ち不味き食、水を飲む

こは他の飲料を飲むだけの資が無いから水を飲むこゝで是れも疏食に準じた飲物としたものだ、此語の意味に就て程子は假令不味ものを食つて水を飲んで居つても樂こ云ふこゝに就ては變りは無い、こ解釋して居る、要するに何れほご甘味いものを食ひ、何れほご結構な飲物を飲んで居つた處で、不義の財によつたものは恰ご浮雲の定めが無い夫れのやうなものであるから少しも羨むには足らぬこ云ふたものである。

八月十六日

■錦を衣て夜行く……………(漢書)

人が立派な着物を着て風采を飾るのは人に見せて誇る心があるからである、それが無いのなれば木綿物でも、又縞柄が何うあらふこも差支への無い筈である處が夜中に何んな立派なものを身につけて歩いたこころで見ると人も無いから何んにもならない、それで漢書には富貴にして故郷に錦を飾らざれば錦を衣て夜

行くが如しこ云ふてある、約まり此語の意味は、自分の榮華の様を人に見せてこそ本意であるが、折角立身出生をしても人が知らねば何んにもならないこ云ふこゝを説いたものである。

八月十七日

■千金の子は堂に垂れず……………(漢書)

是れも漢書の語である、千金の子は金持の子のこゝ、即ち金持の家に生れた子供は大事に育てられて居るから、減多に危険な處へも踏み込まねば悪いこゝもしないこ云ふ意味だが、併し近頃の千金の子は放蕩の結果宜からぬこゝをするものがあるから決して油断は出来ぬ。

八月十八日

■馬疵れて毛長し……………(古諺)

千里の駿馬でも疵れたなれば肉落ち毛長くなつて駄馬のやうに見受けられる、

人間も貧しくなればよい考へも出ず智者も凡人のやうになる。

八月十九日

■疵馬は鞭箠を畏れず………(壇鏡論)

鞭は鞭うたれること、馬も疵れたなれば厳しく鞭うたれても驅はるることが出来なから鞭を恐れること云ふ譯では無いが鞭の指揮通り従はぬが、人も是れと同様で困つた時は随分冒險的なこともやれば、また時の場合によつて法律を恐れぬやうなことになる。

八月二十日

■富貴となれば他人も合ひ、貧賤なれば親戚も離る……(文選)

是は曹顔遠の感舊の詩にある語だが、人の輕薄な根性は現今だけでは無いと見ゆる、殊に現今では尙更ら此通りで、職業に放れ、財産も無く明日の日も喰ひかねるやうな境遇になること、故舊や朋友は元よりのこと、最も近しい叔父甥或

は従弟の間柄でも途中で逢へば顔を反ける、其家へ訪ねて行けば留守を使つて逢は無い、逢へば無心でも吹ッ掛けられることでも思ふのだらふ、處が夫れに引き代へて、今度不意に百萬圓儲けたことか、思はぬ金子が五百萬圓這入つたこと云ふ噂でも立つたなれば親戚朋友は元より、いろんな人間が歡びにくる、こと云ふて百萬圓五百萬圓なぞこと云ふ話は兎も角、早い話が多少財産のある者が病死でもしたなれば意外な親戚がボカ／＼と飛び出してくるものだ「いや私は死んだ誰れ某れの従弟の嫁の家内の従弟で御座います」ことか「私は平日は御無沙汰をして居りますが、御當家の御先祖は斯様／＼な間柄で御座いますから家筋としては最も濃い仲になる譯で、従つて是れを御縁に今後は何うか御別懇に願ひます、さすれば御先祖も草葉の蔭で定めて御悦びで御座いませう」なんかん三人の死んだのを幸ひに近付にならふテな人間も來るものだ。

八月二十一日

男子當死中に活を求むべし……………(後漢書)
讀んで字の如く、男子は苦境に當て氣を挫けて仕舞ふやうでは仕方が無い、更らに意氣を恢復して大に活を求めねばならない。
八月二十二日

患は蕭牆の間より起る……………(古 諺)

大きく云へば一國の禍、小さく云へば一家の患は何んでも無い内輪のこころから起るものであるから氣を注げねばならない。
八月二十三日

虎を養ふて自ら患を遺す……………(史 記)

是れも前の語の意味に於ては大同小異である、虎云ふやつは猛獸中の猛獸だから萬一怒つた時には主人だつて誰だつて容赦は無い、世には白鼠を養ふて帳尻に患を遺すものも尠くないのだから注意をせねばならない。

八月二十四日

魚の釜中に遊ぶが如し……………(綱 鑑)

釜は物を煮る爲めに用ひる器物である、其中に夫れも知らず悠々遊んで居る魚は、危険なものはないが、經驗も無く定見も無いのに投機に手を出す人は、取りも直さず釜中に遊んで居る魚と變りはない。
八月二十五日

滿は損を招き、謙は益をうく……………(書 經)

滿は傲慢、謙は謙遜のこころ、是に類した語は前の方にもあつた筈だから更ためて説明するまでもあるまい。

八月 十六日

死灰復た燃わざらんや……………(漢 書)

韓安國云ふ人、梁の孝王に仕わつて中大夫云ふ位を授けられて居つたが、偶

ま法に觸れて獄に下つた、するに獄吏の田甲云ふ者、常々から安國に快く無かつたを見、いろく辱しめたものだから安國は癢に觸へて「黙れ鼠輩無禮を申すな、俺は今でこそ法の爲めに斯んな目に遭つてはおるが、死灰獨り復た燃わざらんや」云吐鳴るに田甲はせ、ラ笑つて「ウフツ、馬鹿なことを云へ、消れた火の灰が燃わ出すやうなれば俺は斯ふして消してやる」云無茶な男もあつたもので、前をまくつて安國の頭から小便を放りかけた。

處が人の運命云ふのは判らんもので、其後間も無く安國は罪を赦されて梁の内史云ふに「云ふに知事のやうな役目だ、其役目を申し付けられたから驚いたのは田甲である、是りや竹筥返しを喰つては大變と思ふたものか、早々に役目を引いて仕舞つたから安國は田甲に向ひ「何うちや是れでも死灰が燃わぬか、汝が此後でも官に附いたなれば吃度汝を初め一族のものを滅して仕舞ふぞ」云ふたので田甲は青くなつて罪を詫びた云ふ話がある、約まり此の語は、人

さだから成るべくなればアマリ應用したくは無い。

八月二十九日

■羹に懲りて齧を吹く(一に齧を喰と記したものもある)………(書言故事)

イソツプ物語で斯んな話を讀んだことがある、狐か狸か忘れて仕舞つたが、友達の家へ招かれて行つて、御馳走に出してくれた熱い羹汁を何んの氣も無しにグツグツ一口飲むに、何さま熱い吸物だから忽ち火傷をした、處が次ぎに運ばれたのは冷肉の御馳走だったが、先の汁に懲りたものだから今度は用心をして吹きく喰つた云ふやうなことがあつた、此の語は取りも直さず夫れで、一度酷い目に逢へば臆病になるものだこの意味である、俗に落武者は薄の穂にも怖れを抱く云ふのは是れに意味を同じくして居る。

八月三十日

■月を指して指を認める……………(大佛頂經)
 譯の判らぬものに物を教へるには餘程氣を付けねば容易に意味の通ぜぬもの
 だ、早い話は月を知らぬものに「それ、彼方に月が……」空の月を指でもつ
 て教へるこ、相手は月を見ないで其指に目を付け「ハ、ン、成程、月云ふの
 はそんなものですかい、夫れなれば私も夫れ此處に月が十本あります」云ふ
 やうなことがあるものである。

八月三十一日

■蠶を拾ひ鰻を握る……………(韓非子)
 蠶は其形毛虫に似たもの、鰻は其形蛇に似たもので、毛虫も蛇も共に人の嫌ふ
 ものだが、さて金儲きなれば婦人でも其毛虫に似た蠶や、蛇に似た鰻を平氣で
 掴んで何んこも思はぬものである。

九月一日

間は何んな出世をするかも判らぬから輕蔑してはならぬ云ふ意味である。

八月二十七日

■白刃胸に扨ふときは則ち目流矢を見ず戟を抜いて首に加へられ
 んとする時は則ち十指を辞せず……………(荷子)
 大刀を翳して今にも胸に刺し貫ぬかれんとする場合には矢が飛んで來た處で夫
 れに目を移す餘猶も無い、また戟を執つて今にも首を打ち落そう云はれたな
 れば、兩手の指を悉皆切り取られるこも其方にしてほしいのは誰れしも人情で
 ある。

八月二十八日

■暴を以て暴に易ふ……………(禮記)
 周の武王が殷の紂王を攻め討たふ云ふのを聞いた家來の伯弟、叔齊云ふ二
 人の兄弟は武王の馬の轡を押けて「ア、一寸お待ちなさいませ、恐れながら先

君のお薨去になつてまだ間も御座いません折柄、兵をお動かしになるのは孝道に欲けませう、何うあらふもお忌明までお待ちになつては如何で御座います殊に相手ごお目さしになる紂王は大君では御座いませんか、臣の身を以て大君を攻めて弑し奉らふとするのは仁に云はれますまい」諫めたけれども武王は耳にも入れず勢を進めて遂に殷を討ち、自ら天子になつて仕舞つた、するに曩に諫めた伯、叔の兄弟は「何うも孝道も知らず仁道をも忘れて仕舞ふやうな主君に仕へるのは節義のある武士として愧る處だ、我れは到底周の祿を食むべきでは無い」職を辞して首陽山に隠れ、西山の蕨を採つて食して居つたがトノノ餓死をして仕舞つた、此の兩名が、武王が殷を討つて自ら天子になつた時に「ア、何んぞ云ふ乱暴なことであらふ、暴を以て暴に易ふに云ふより外は無い」嘆息をした、そこで爾來乱暴なものが乱暴な相手を凹ますのを暴を以て暴に易ふといふのであるが、何うも暴に云ふことは甚だ穩かならぬこ

■鼠の器物を嚙むは器物を欲するにあらず……………(西 諺)
 鼠が家財や器物を傷けるのは其目的では無い、所謂敵は本能寺で、器物の中に容れた食物が欲しさに嚙るのである。

九月 二日

■氷炭相容れず……………(楚 辭)
 炭は火のこころ、氷は火を消し、火は氷を溶かすから氷と火は一緒に置くことは出来無い、夫れと同じこころで正直なものに奸佞なものに並び居ることは出来ぬこのべたのである。

九月 三日

■影は身を離れず……………(莊 子)
 善いこころをすれば善いこころが付き纏ひ、悪いこころをすれば悪いこころが付き添ふものである。莊子の漁父篇に、人、影を恐れ、迹を惡みて是れを去らんとして

走る者あり、足を舉る愈よ數しくして迹愈よ多し、走こ愈よ疾くして影身を離れず、自ら思へらく尙遲しこ、疾く走つて休ます力絶て死す。

九月 四日

■蚊虻は牛羊を走らす……………(淮南子)

虻はあぶ、蚊や虻は少さくこも牛や羊の忌み嫌ふものであるから、牛や羊が是れに目が付くこ走らぬまでも無暗こハチ拂ふ、即ち小なりこも能く大を制するこは是れである。

九月 五日

■先んずれば人を制し後れば人に制せらる……………(史記)

先に述べた「兵は拙にして速きを聞く」こ云ふのこ同じやうな意味である、史記の頂羽本紀に會稽の守、殷通、項梁に謂て曰く、江西皆反す、此れ天の秦を亡ほすの時なり、吾れ聞く先んずれば即ち人を制し後れば人の爲めに制せらる

れるこ云ふのから起つた語だが、荀子には人を制すこ人の爲めに制せらるこ相去るこ遠しこ云ふておる。

九月 六日

■鳥起つ者は伏なり……………(孫子)

源義家が秀衝を討伐の時、大江匡房に訓へられた軍法により、雁行の乱れるを見て敵に伏兵のあるを知つたこ云ふのは此語である、單に鳥起つ者こ云ふたゞけでは判りかねるが、鳥は主として横に平たく飛ぶものであるから、飛んで居る内に俄かに高く上るものは其地上に何か鳥の恐れるものが無くてはならぬ筈である、また夫れこ反對に、如何に堅固な城砦があつても其屋上に鳥が集まつたり、其上を平氣で飛び舞つて居れば其下には敵の勢が居らぬか但しは他に潜んで居るここ、察するここが出来るこ云ふのである。

九月 七日

■死地に陥りて然して後に生く……………(孫 子)
身をすてゝこそ浮ぶ瀬があれ云ふ俗諺と同じ意味である、是れも前に述べた
背水の陣と同一である。

九月 八日

■螳螂臂を怒らして車轍に當る……………(孫 子)

人が蟹を捧の先か何かで突けば蟹は怒つて二つの爪を翳し、觸れる處を挟まふ
こするが、是れを頭から踏み潰せば何んでもないことである、

此語は夫れと同じく弱きものが身の程も知らずに強き者に當らふこする愚を云
ふたもので、莊士の天地編には以上のやうな例に於て居るけれども淮南子の
人間訓に、齊の莊公が獵に出でた時、道に一疋の小さな虫があつて、王の乗つ
た車の轍に向ひ足をあけて搏たふこして居るから王は夫れを見て御者に彼れは
何んこ云ふ虫か尋ねるこ御者は「恐れながら彼れは螳螂と申しまして、自分

の力も量らず向ふ行一方の虫で御座います」こ答へるこ莊公は「ホ、ー、さて
は彼れを螳螂と云ふか、感心な奴ぢや、人間なれば天晴天下武勇の士であらふ
」こ車を避けて通つたこ記しておる、因みに螳螂は俗に云ふカマキリと云ふ
虫のこと。

九月 九日

■窮寇は迫る勿れ……………(孔 子)

窮寇とは糧食の途絶わ、舟既に沈みて只だ部伍を組んで營舎も結ばず敵に一戦
を求めて死生を決しやうこして居る軍勢のここで、此んなものに攻め掛つて行
けば反つて彼れの爲めに敗られる恐れがある、寧ろ此んな敵には此方から手出
しもせず緩くして居れば相手は逃げ去るものである、世に云ふ窮鼠反つて猫を
嚙むと云ふのを語を變へて云ふたものだ。

九月 十日

■大功を成す者は衆に謀らず………(戦國策)
 計略は密なるを尊ぶ云ふ通り、獨り兵事に止まらず、世上の事に於てもべら
 く謀言ものに大いなる功をたてた例は無い。

九月十一日

■將に之れを奪はんと欲せば必ず固く之れを與ふ………(老子)
 敵に甘味を見せておいて終ひに取つて仕舞ふのは上乘の計略である、尤も此の
 方法は軍法だけでは無い、商家の奥の手として夫れだ、客に甘味を見せて終
 ひには此方の思惑通り品物を賣り付ける、是れを極端に現はしたものは現今新
 聞の廣告を利用してやつて居る諸種の懸賞方法や、或ひは幾許の品物を買へば
 觀劇券を進呈するとか、但しは品物を買ふた客に抽籤券を添けて割引を抽籤で
 行ふなんか云ふのは何れも此の方略である、云ふて品物を買ふのは戦國違
 ふから策略に乗つた處で生命には別條もなければ罷り違つたところで別段大し

た損害になる譯でも無いから此方は左程心配をするにも及ばぬが……。

九月十二日

■輿人輿を成せば人の富貴を欲む………(韓非子)
 韓非子にある此の句の一章を描して見るに、輿人輿を成せば人の富貴を欲み、
 匠人棺を成せば人の天死するを欲するなり、輿人仁にして匠人賊なるに非ず、
 人富貴ならずば則ち輿售れず人死せざれば則ち棺を買はず、情人を憎むに非ず
 なり、利人の死にあればなり、故に后妃夫人太子の党成て君の死するを欲るな
 り、君死せざれば勢ひ重からず、情君を憎むにもあらざるなり、故に人の主は
 己れの利する者は心を加へざるべからず云々。輿人とは昇夫のこゝ、匠人とは
 大工のこゝ、此の語中にある賊は盜賊の意味では無く單に惡者云ふ意味であ
 る。

九月十三日

■牛首を懸けて馬肉を賣る………(晏子春秋)

羊頭を懸けて狗肉を賣る云ふ古諺がある、是れは無門關から出たもので、羊の頭を看板に掲げて狗の肉を賣る云ふ譯で、世には人を誤魔化すものに此の語を充てはめて居るが、茲に述べた牛首を懸けて云々には次ぎのやうな語源がある。

靈公は城内の侍女に男の風をさして悦んで居るに一般の人民は其事を聞き傳へて自分の女房にも娘にも男の風を装はせ「是れが當世の流行だ」なんか大いにハイカッてきたものだから靈公は「そりや怪しからん、乃公の城内で乃公が好き好んでやらして居るここを下々の者等が眞似をするには何んたることだ、今後は一切相成らん、そんな奴を見つけ次第に其着物を引き裂き帯は切つて仕舞へ」に非常な立腹で役人に云ひ付けたから役人は其通りやつて居るが、流行云ふものは恐ろしいもので、中々夫れくらいでは止まりそやうな様子も無い、

かへつて愈よ激しくなる様子に役人も手古摺て其旨を靈公へ復命に及んだ、するに靈公にはいろ／＼に思案の末、當時の學者をして有名であつた晏子を御前へ召し出し「斯様くの次第だが、其方の考へを以て何んにか止める工夫はあるまいか何うちや」尋ねられるに晏子はニタリニ笑つて「そりや譯も無いこと御座います」「ホ、一、然らは何んかすればよい」「左様で御座います、諺に上の好む處、下之に做ふことすら申すほどで御座いますにより先づ宜しく御城内の侍女達の風体よりお改めになるが第一に心得まする、城内の風を改めずには外の者等に厳しくお禁めになられますは是れ牛首を門に懸けて内に馬肉を賣るが如きものに御座います、賢明なる大公には何んかして斯様のことを御承知になられませんか」云ふ言葉に靈公は道理なりとあつて城内の風儀を改めること夫れから間も無く國內にも婦人の男装するものが無くなつた云ふことである。

九月十四日

■二十六計走 を上計こなす……………(北 史)
 三十六計逃ぐるに如かすは昔から有名な語である、逃ぐるに云ふては語幣は
 あるが、已れの爲めによく無いと思ふ時にはゴタ／＼して居るよりも所謂三
 十六計を以て其場を外すに限る、是れを云ひ換ゆれば 諺に云ふ「君子は危ふ
 きに近寄らず」である。

九月十五日

■大家の將に顛らんとする一本の支ふる所に非ず……………(宋 書)
 大きな建物が崩壊やうとする時には一本の柱を以て支へることは出来無いやう
 なものでも大勢の決する時には一人何れほご力んだ處で何んの甲斐も無いもの
 である。

九月十六日

■蔦は松柏に施ふ……………(古 諺)

蔦は松や柏の樹の幹に纏ふて茂ることは出来るが一本立は覺事無いものである
 夫れと同じく兄弟親戚は互ひに睦み合ひ、長上のものを頼るやうにすれば安全
 である。

九月十七日

■冠履を貴びて頭足を忘る……………(淮南子)
 本を忘れて末を尊ぶことである、例へて云へば茶事をするのは氣を慰さめる爲
 めに茶を飲むのか趣旨であるべき筈を、現今では掟に拘束されて心を慰さめま
 ころか、冷汗を腋の下に流しながら茶碗を手にしたり、甚だしいのは肝腎の茶
 よりも茶器を玩ぶことに重きをおいておるやうなものだ。

九月十八日

■耳を貴んで目を賤しむ……………(桓子新論)
 昔のこころを貴んで今のこころを賤むに云ふ意味だが、老人などは「現今は斯ふだ

けれども昔は中々……」なんか云ふことは随分話に出るこゝだ、いや夫れよりも早い話は昔の豊臣秀吉は中々立派な人だった、身は卑賤から起つて遂に位大官を極めた古今の大英傑だ。人は賞める、如何にも秀吉は大英傑であつたに相違は無いが、然らば先年哈爾濱で悲愴な最期を遂げた伊藤博文侯は何うだ、尤も其智略に於ては秀吉に比べものにならずとも、伊藤侯も元は餘り身分の無い家から出て遂に天下の大官を極め、其勳位は絶後には云へぬが眞實空前である、秀吉如何に豪くとも勳記位階に於ては伊藤公の方が上だ、尤も其時代には勳記は無かつたにしろ……處が古い秀吉を讃へて新しい伊藤侯のこゝに就ては左程までも口にせぬのは是れも耳を貴んで目を啓める方云ふてもよい、云ふて著者は強ち伊藤公にカブれたわけで無いが、只だ其例を擧げて見たまでである。

九月十九日

■人常に菜根を咬み得ば、則ち百事做すべし………(汪信民)

人は野菜物の根ばかりを咬んで居つたなれば何事でも成し遂げられる云ふ譯では無い、茲に云ふ菜根とは粗末な食物云ふ意味で、誰れしも滋養になるものや、旨いものを喰ひたいのは人情だが、粗末な食物で甘んじて居るだけの辛抱が出来るやうなれば一事が萬事だから、何んな辛抱も出来る、従つて物事も成し遂げ得られる譯である云ふ説いたものである。

九月二十日

■家雞を輕んじて野雉を愛る………(古 諺)

家に畜ふた雞は見なれて居るから何んでも無いやうに思ふが、野の雉子を偶々見ると珍らしく思ふ、是れを換えて言へば、魚屋から買ふた大きな魚よりも自分の釣つた小さい魚の方が大切に思ふ云ふやうな意味となる、約まり珍らしいものを愛でたがるのは人情である云ふ語だ。

九月二十一日

■良驥の足を絆して責むるに千里の任を以てす………(文 選)
 何んな名馬でも足を束られて走れ云はれた處で走れるものではないのは、苛酷な主人が、奉公人を召し遣ふやうなもので、如何に奉公人だから云ふて人間の身体に變りの無い以上、無暗に使はれてはたまつたものでは無いから人を使ふものは人の情を察してやらねばならぬ。

九月二十二日

■淵に臨みて魚を羨むは退きて網を結ぶに如かず………(漢 書)
 何事も實行が肝腎である。淵に臨んで泳いで居る魚を何時まで羨ましそうに眺めて居つた處で自然に自分の手へ入りそうな筈は無い、それよりも早く自分の家へ歸つて網拵へをする方が何れほご勝かも知れない。

九月二十三日

■鬼の念佛………(俚 諺)

鬼云へば心の兇惡なものにして居る、其鬼が念佛を唱へて後生を祈つた處で何んにもならない、夫れよりも兇惡な心を除き去るやう努めたなれば何れほご功德になるだらふ、世の中には是れと同じやうな話が現實に随分ある、其例を擧げて見れば嫁に當り散す意地の悪い嬭かお寺參りをしたり、家では一錢一厘の金も八釜しく云ふて居る吝な者が遊所町へ行つて怪しげな女に紙幣束を切つて氣前を見せておるやうなもので、嬭のお寺參りは鬼の念佛と同様、夫れよりも嫁に穩やかにする方が何れほご後生の爲めになるかも知らず、吝坊の遊所通ひに至つては論外の沙汰で、如何に氣前を見せた處で平生が平生だから何處かに持ち前の氣分が現はれて女が惚れるどころか反て其馬鹿さ加減を笑つて居る位が關の山だ、それよりもそんな金子があれば門に立つ憐れなものに五厘一錢づゝ與へる方が何れほご金が生きるか判らない。

九月二十四日

■名玉と雖も故なくして人に投ずれば人必ず怒る……(古 諺)
 何んな高價な珠でも不意に頭へ投げ付けられたなれば誰れでも怒るのは當然の
 ことである、いや、投げつけずとも見も知らぬものが自分の面前へ「是れを汝
 にやる」なんか五十錢銀貨を突き付けられたなれば乞食で無い限り常識のあ
 るものは必ず怒るに相違は無い。

九月二十五日

■人間萬事塞翁が馬……

(淮南子)

塞さい云ふ土地に或る老人があつた、其家に飼ふてあつた、一疋の馬が胡こ云ふ
 土地へ逃げ走つて行邊知れずなつたので知己の人々等「何うも惜しいことをし
 ました」なんか慰めに來て見るこ、落膽して居る筈の老人は至極平氣で「な
 ーに、世の中のこは判らんものです、馬は無くなつて如何にも残念こ云へば

残念ですが、それでも私の考へでは別に不幸こも思つては居ません」こ澄し切
 つて居るので案外の心地で引き取るこ、數月の後、先の馬は無事で歸つた剩さ
 へ、胡から中々の良馬を一疋伴れて來た、するこ是れを聞き傳へた知己の人等
 は「前に馬を失つたのは不幸では無いこ云ふたのは負惜こ思ふたが成程負け惜
 みぢや無かつた、併し今度は悦んで居るだらふ」こ云ふので老人の家へ出掛て
 行つて悦びを述べやうとするこ老人は又しても「なーに、世の中のこは判ら
 んものです、成程自分の馬が戻つた剩さへ世にも勝れた名馬が一疋儲かつたや
 うなもの、此んこは別段幸福こは思ふて居ません」こ案外の言葉に勢ひ
 も抜けて引き取つた、處が其老人の息子は大變な馬好で閑のあるこに馬に跨
 るのを樂しみこして居つたが或日馬から轉がり落ちて片足を挫いたので知己の
 人等は捨ておがれ無い、彼の負け惜み老爺のここだから最早大抵のここなれば
 捨ておくが、最愛の一人息子が片足を折つたこして見るこ知らん顔をして居る

譯にはゆかぬ、だか夫れにしても如何な老人も今度は弱つて居るだらふも
 や出掛けて来た、するも老人はニコ／＼笑ひながら「なーに、彼んなくらいの
 ここは不幸も思ふては居ません、人間の……」此例によつて例の如しだから
 知己の人々も餘りのここに愛想を盡して歸つて仕舞つた、夫れから一年後のこ
 こである、何かのここが發端となつて塞み胡と兩國の間に戦争が起つた、めに
 塞の若者等は何れも戈を執つて戦ふことゝなつたが、聽て戦争の濟んだ後、調
 べて見るも其十中の九までは戦死を遂げたけれども彼の老人の息子は無事であ
 つた、夫れも云ふのは片足折れてある爲めに戦には出なかつたからである、そ
 こで世の中のここは善いことも悪いことも判らない、一寸先は暗だも云ふやうなこ
 所に、人間萬事塞翁が馬も云ひ初めることゝなつた。

九月二十六日

■已れに克ちて禮に復るは仁と爲なり……………(論語)

已れも云ふものは何うも我が儘なものである、従つて已れに克つは其我儘な
 氣性を押へるこゝであるが是れは何んでも無いやうに見えて中々六かしい、だ
 が已れに克つは人の盡すべき道であつて仁を爲すべき根本である、そこで論語
 には已れに克ちて禮に復るは仁なるなりと書いてある譯だ、此の禮に復るは
 心を素直にするこの意味である。

九月二十七日

■朝に道を聞いて夕に死すとも可なり……………(論語)
 是れも論語にある語だ、道は天の道、人の盡すべき道である、人を生れて是
 れを朝に判るこゝが出来たなれば夕に死んでも遺恨をすることはないと云ふ意
 味で、朝夕は其間の最も近きに譬へたものである。

九月二十八日

■善を積むの家には必らず餘慶あり、不善を積むの家には必らず餘

殃あり………(易 經)

善には善報あり悪には悪報あり云ふのと同じ意味である、善を積むは今日一善を爲し、明日一善を爲し、是れを次第に重ねて久しきに亙るの言ひで斯くすれば慶び事は自分一身のみならず溢れて子孫にまで及ぼすが、是れ反對に悪を重ねてゆけば其殃ひはまた已れ一身のみならず子孫の身の上にも及ぶものである。

九月二十九日

■隠れたるより顯るゝは莫し、君子は其獨を慎しむ……(中庸)

隠れたる處は暗きところは即ち自分の心の中を云ふたもので、獨は自分のことである、そこで此の語の意味は、隠れたること、即ち自分の心の中へ人は知らずとも自分にはよく判つておる、天下の事々の内でハッキリ判つて居るのは自分の心に過ぎたるものは無い、だから君子は自分の心の中に萬

一悪念でも萌した時には是れを押へ付けて増長させないやうにしておる。

九月三十日

■好事門を出でず、悪事千里を傳ふ………(事文類纂)

人情云ふのは妙なもので、人の善事はアマリに聞きたがりもせねばまた是れを語ることも好まないが、悪いことは謀々謀言たがるものだ、新聞なんかでも特別の人のことなれば兎も角、普通の人の善事を書きたてたなれば讀者の氣受けがよく無いけれども、是れに反して人の悪事を摘發し、大きな見出し文字を置いて書き立てる中々によく賣れる云ふことである、従つて好事、即ち善事はアマリ外へ聞かぬけれども悪い事は忽ちの内にバツと傳はるものである云ふ意味を云ふたものだ。

十月一日

■禍福門無し、唯だ人の召くところによる………(左 傳)

禍わざはひも福さいはひも人ひとによつて決して定さだまつたものではない、約つづまりは人ひと自分じぶんから招まねくに外ほかならぬ、云いふのは人ひとが自みづから悪わるいことをすれば取りも直たださは是これが禍わざはひひに入るの門もんで、良心れうしんが咎とがめて自みづから自じ身を責せめ、遂つひには捨すて鉢はちになつて益ますく々あつ悪わる事を重かさねた末すえは自じ分の周しゅう圍ゐは禍わざはひによつて包つまれるやうなこゝとなり、善ぜん事じをなせは夫それと反はん對たいに幸さい福ふを招まねくやうなもので自じ分ぶんの心こゝろも愉たの快わいなれば、他人たにんからも尊そん敬けいをせられる、從したがつて信しん用ようも愈いよ出來きて幸さい福ふの上うへに幸さい福ふを重かさねるやうなこゝとなる、然しかも此この禍わざはひと幸さい福ふは始はじめから天てんに定さだめた門もんがあるのでは無なく人ひと自みづから招まねいて定さだめるのである。

十月 二日

■善ぜんを爲なすに名なに近ちかづくなかれ、惡あくを爲なすも刑けいに近ちかづくなかれ………(莊 子)

自じ分の功こう名めい心しんを充みたす爲ために善ぜんをしては實じつ際さいの眞しん情じょうが籠こもらぬものであるから善ぜん

事じは云いはれ無ない、また惡あくを爲なせば必かならず掟おきてに觸ふれるに定さだまつたものである、尤もつも掟おきて云いふた處ところで、公こうの法はふ律りつだけでは無ない、人じん道だうの掟おきてだ、云いひ換かへれば惡わるいこゝをすれば法はふ律りつの如いかにかゝはらず道どう徳とく上じやうの罪つみを犯おかすこゝとなる、だから仮た令れい惡わるいこゝをした處ところで道どう徳とく人にんの罪ざい人にんならぬ迄までの範はん圍ゐに於おいてせよ云いふ意味いみだが、一方いつから云いへば道どう徳とく上じやうにさへ觸ふらねば何なにも罪つみ云いふに足たりぬやうなものであるけれども、聖せい人にんの心こゝろでは善ぜんを爲なすこゝを普あ通たりに心こゝろ得とて居おるから善ぜんを爲なさんんでも既すでに罪つみであるこゝ自じ信しんしたかも知しれない、今いま時ときの人ひとに斯こんなこゝを云いへば「馬ば鹿かな」一言ひとことの下もとに笑わらふだらふ、けれども夫それくらいの心こゝろ掛かけを持つて居おれば恰たうどよい加か減げんになる。

十月 三日

■成せい功こうの方ほう法ほうは必かならずしも之これを知るを要やうせず、能よく一じ事じを爲なすべきを知しりて全ぜん力りきを注そげば足たり………(ワナメーカー)

別段説明の必要は無いと思ふ、物事は八方へ手を廣げれば所謂二兎を追ふものは一兎を獲ず、結局は何方付かすになつて仕舞ふものだ。
十月 四日

■婦を教へるは初來にす……………(顔氏家訓)

斯ふ云ふ婦人には聊かお氣の毒だが、事實女云ふものは御し難いものである、初對面の時には温和く見わたる慣れは次第に圖々しくなる……云ふて十人が十人まで云へないだらふが、併し是れが女としての本性らしい、だから女を教へるのは初めが大切である、初めに篤く教へておかねば慣れて圖々しくなつては中々に教へ難いものだ、それと同じく小供の躰も初め……では無い幼少の時分から自然的身に滲むやうにせねば、大きくなつてからは何れほぎ誨へやうとした處で恰ぎ附け焼刃のやうなもので深く効を奏するもので無い。
十月 五日

■十讀一寫に如かず

(鶴 玉露)

是れは別に説明の必要もあるまい。

十月 六日

■已を釋きて人を教ふるは逆、已れを正して人を教ふるは順……………(明心寶鑑)

人を誨へ人を導かふとすれば先づ自分から夫れだけの行ひをやつてゆかねばならない、自分が實行せずして人のみに責めるは間違ひである、教壇で殊勝氣に説教をする坊さんが内密で五戒を破つたり、教場で生徒に向つて倫理を説く教員が破倫な行ひをしたりするやうなことがあつては説教をうけるもの、教へる受けるものは其人を信ぜぬやうになるものだから従つて其云ふたことも眞面目で聞くものは無く、人の示しこなるべき上役人が罪を犯すやうなことがあつては下々の人民も罪云ふこに重きを措かぬやうになる。

十月七日

■足容は重、手容は恭、目容は端、口容は止、聲容は静、頭容は直、氣容は肅、立容は徳、色容は莊……………(曲 禮)

足容は足の運び方のこと、足の運び方、即ち歩く足つきは重々しくするがよい、手容は手の置き場所のことで、手は膝の上にチャーンと載せておくやう心掛ねばならない、懐手をしたり胸先で野郎を拵へるのなどは論外の沙汰である、目容は目つきのことだが、目云ふやつは其人間の品性を遠感無く現はすものであるやうな、いや、やうなところでは無い、事實に於て目付き一つで其人の性質は粗ぼ判るものだ、心の落ち付かぬ人の目はキョトクとして居る、悪心を抱くもの、目は何處もなく隠険なものである、其他此んなことを数へたなれば随分あるが要するに眼は正しくすることに心掛ておれば自然に心も正しくなる、それから口容は口のこと、口は常に閉じて居らねばならぬ、平常

もダラリ三口の開いて居る人間に賢い者は無い、次ぎに聲は話をするにもギャア／＼云ふては不可ない、頭は正しく、心は嚴格にもち、禮儀を崩さぬやう、顔……色容は人に犯されぬやう威權を保つて居る心掛が無くてはならぬ。

十月八日

■虎は死して皮を止め、人は死して名を残す……………(俚 諺)

虎云ふやつは生きて居る時には猛獸として夥多の獸類に恐れられ、其皮が綺麗な處から死んだ後でも其皮を世に尊重される、虎ですら夫れだ、況して萬物の靈長云はれる人間は生のある時には世の爲めに功をたて、死んだ後までも其芳名を傳へて尊重される心掛が無くてはならぬ。

十月九日

■何人も其希望を悉く満足せしむるを得ず……………(セネカ)

人間の望みには際限が無い、一を望んで一を得れば更らに二を望むのは人情だ

、従つて是れでよい是れで満足だ云ふことは無い、身の本分を知つて安じて居る人にも物質以外の要求は更らに必ずあるものである。

十月十日

■美人黄土となる、況んや乃ち粉黛の飯をや……………(杜子美)

何んな美人でも死んでは失ツ張り土となるものである、況して化粧を施して美を飾つて居るものは死ぬまでも無く、化粧が脱げれば決して美人云ふことは出来無い、飯は自分の持前でなく、外から施した飯りのもの云ふ意味。

十月十一日

■仁に過ぐれば弱くなる、義に過ぐれば固くなる、禮に過ぐれば諂ひとなる、智に過ぐれば嘘をつく、信に過ぐれば損をする、氣長く心穏やかにして萬に儉約を用ひて金を備ふべし、儉約の仕方は不自由なるを忍ぶにあり、此世に客に來たと思へば何ん

の苦もなし、朝夕の食うまからずともほめて食ふべし、元來客の身なれば好嫌は申されまじ、今日行ひおはり、子孫によく挨拶して、しやばの御暇申すべし……………(伊達正宗)

伊達政宗は有名な武將であつたが、是れによつて更らに名將であつたことも判る、如何にも此の語の通り、仁義禮智信の五常は人間にもつて居らねばならぬ處だが、物には程度がある、此の五常も過ぎては反つて宜しく無い、それから人間の一生を此の世へ客に來たと思へば是れもよく云ふた、誰れだつて他所へ客に行つて無遠慮なことをするものは無い、禮儀も尊べば少々氣に入らぬことがあつても我慢をする、何んな人間だつて他所の家になつて居る内は氣儘八百を並べるものはあるまい、自分の家なれば勝手なこともするが、外ではそんなことを出来るものではないから、不自由のことがあり、望む處があつても客に來たと思ふて我慢をして居るがよい。

十月十二日

■寡欲にして後に欲多きを知り、過ちを改めて後、過あるを知る

..... (格言僅録)

常に臭いものゝ中に居つては臭いことが判るものではないが、其境遇から放れて初めて其臭かつたことが判るものである、それと同じごとく慾の深い人間は自分で慾の深いことは氣つかぬものだ、自分のことは當然のやうに思ふて居るけれど、其慾が無くなつた後で「フム、成程、自分は今まで慾が強すぎた」を覺ることが出来る、また過に於ても夫れと同様で、悪いことをして居る内は、自分の悪いことに氣はつかぬものだが「何うも俺は今まで悪かつた」を覺つて見れば、人の悪いことをして居るのがよく目に付くものである。

十月十三日

■疾無きものは醫者を求めず..... (キリスト)

醫者は病氣を癒やすが爲めに無くてはならぬが、病氣で無いものは醫者を迎へる必要は無い。

十月十四日

■君、爲めに身をすつるを忠と云ふ、親の心に脊かずしてつかふるを孝といふ、老たるを敬ひ、士卒を撫育し、國民を憐れむを仁と云ふ、一度諾して變せず、終始全きを義といふ、謙退辞讓を禮といふ、謀略を惟幕の中にぐらし、勝つことを千里の外に施すを智といふ、かりにも虚言を構へず、信を失ふべからず、遠き慮り無き時は近き憂あるべし、萬事に愁ひず屈せず、過つて改むるに憚ることなかれ、邪曲輕薄の人と交るべからず、大酒は失多し、色情は身を失ふ、心ひがむは嫉妬偏執の深きなり、儉約を専とし驕りを慎しみ、人の非を見て我身の行ひを正

すべし、我恐なるが故に譬書して箴となすのみ……(楠正成)
南朝の大忠臣にして智謀勇倫の名將と聞ゆし楠正成の座右の銘としたのは是れである、上に盡忠を以て仕へ、下は部下を憐んだ故名將の面影は此の座右の銘によつて遺憾無く窺ふことが出来る。

十月十五日

■正直の頭に神宿る……(俚諺)

神は非禮をうけ給はず云ふ諺もある通り、心を正直にして居れば自然に幸福のあるものである。

十月十六日

■今の教ふる者は估畢を伸す……(禮記)

學を極めずして人の師となるものを諷した語で、伸は謳たふ云ふ意義、そこで此の語の意味は、今の教へて居る先生云ふのを見るに、其教へ方は只だ口

先だけで謳ふて居るやうなものだから、習ふものも一向腹に入れて覺ゆることは出来無い、斯んな先生は世の所謂素讀先生だ、恰ご蓄音機のやうなもので此んな先生に教へをうけるのは勉強をするのでは無く、蓄音機を聞いて楽しんで居るやうなものである。

十月十七日

■疾行には善迹なし……(西京雜記)

枚臯云ふ人の文章を草するのは中々に早かつた、筆を執つて紙に臨むに忽ちの内一文が出来あがるが、長郷云ふ人は夫れに反對で一文ころか、一行を書くのも中々容易では無かつたほごだから長郷が一文を作る間に枚臯は何れだけの文章を作るかも知れぬほごであつた、が併し其脱稿したのを讀んで見るに、長郷の文章は艶麗玉の如く、一字一句疎かにはして居らぬが、枚臯の文章は累句があつて到底長郷に比べるこゝは出来がたいほご不味かつた、是れは枚

卑に限らぬ、凡て早く仕事の出来るものは宜き結果を求めることは出来ぬもの
 だ尤も是れは文章だけでは無い、何事に於ても其通りである。
 十月十八日

■險語鬼膽を破る……

……(唐 詩)

六かしい字句は鬼ですら吃驚するに云ふ意味だが、是れは善意にまつてよいか
 悪く解釋してよいか考へものだ、だが併し文章としては餘りに六かしい語句を
 並べるのはよくあるまいと思ふ、殊に近頃の學者は六かしい文字さへ使へば文
 章は立派なものゝやうに考へて無性矢鱈にいろんな漢字を並べたてる、甚だし
 いのなるに何んな氣で使ふのか知らぬが要も無いのに殊更ら外國語を挿んだ
 ものすらある、そして意味が充分に通じて居るか云ふに斯んな文章に限つて
 捉まへごころの無いやうなこゝになつて居る、何うも悪い流行ごだ。それよ
 りも平易な文句でもつて文は不味くとも意味の透徹するやうにしたいものであ

る、だから孔子も論語に「辞達して已む」に云ふて居れば、莊子の天道扁に「
 語の貴ぶ所のものは意なり」に記してある。

十月十九日

■吉事には左を尙び、凶事には右を尙ふ……(老子)

だから現今繁華な市中では左行制度をまつて、警官が往來のものに「左へく
 こ」差圖をする譯ではあるまいが、兎も角も左を尙び、左を上とするのは禮儀
 としておる、老子に「君子居る時には左を貴び、兵を用ひるには右を貴ぶ」ま
 た「吉事には左を尙び、凶事には右を尙ぶ、偏將軍は左に居り、上將軍は右に
 居る、言は喪禮を以て之を處す、人を殺すこゝ衆ければ哀悲を以て之れを泣き
 戦勝てば喪禮を以て之を處す」に述べてある、語中の偏將軍は副將軍のこゝ
 で、喪禮は凶禮のこゝだ、それで左は陽、右は陰にしてあるから吉事には陽
 の左を尙び、凶事には陰の右を尙ぶものであるが、副將が左に大將が右に居る
 右

のは凶禮を以て處するからである、それで戦の爲めに人を殺すことが多ければ
哀しみ悲しんで泣き、戦が勝てば凶禮を以て處し、古は兵を出すのには凶門か
ら出すのを法として居つたのである。

十月二十日

■履新らしと雖も冠となさず……………(韓非子)

物事に順序があれば人には階級がある、其順序を階級を破つては世の中は滅茶
くである、履は何れほぎ新らしく立派でも足へ履くべく造られたものだから
冠の代りに頭へ戴くことは出来ない。

十月二十一日

■眞は立つが如く、行は行が如く、草は走るが如し……………(東坡)

是れは書体を説いたものだ、文字には眞行草の種別があるが、其書くに就て矢張
り一定の筆法がある、筆法は取りも直さず此の語の通りで、眞は人間の立つ

たやうに、行は歩むがやうに、草は走るがやうな心を以て書かねばならぬ、處
が是れを書くにも順序がある、夫れに就て東坡は「未だ能く立ち能く行かすし
て能く走るものはあらず」云、即ち順序は崩せない云ふておる。

十月二十二日

■人を繪くものは其情を繪く能はず……………(鶴林玉露)

前には書のこと述べたから、序に畫の語を選んだ、鶴林玉露に此の語に就て
「雪を繪く者は其清きを繪く能はず、月を繪くものは其明を繪く能はず、花を
繪くものは其馨を繪く能はず、泉を繪くものは其聲を繪く能はず、人を繪くも
のは其情を繪く能はず、然らば則ち言語文字は固より以て道を盡す能はざるな
り」云、如何にも其通りで何んな名畫も實物には敵することが出来無い、巨勢
金岡の書いた馬は夜抜け出して草を喰みに行つた云か、應舉の幽靈は抜けて人
を脅かした云か云ふ話はあるが、是れは無論作りごこで、其情が眞に近いから

云ふたものだ、けれごも如何に巧であらふごも、人爲を以て到底天の自然に勝つごこは出来るものではない。
十月二十三日

■善遊ぶものは弱る………(淮南子)

よく遊ぶものは水に溺れ、よく騎るものは馬から落ちるのは自分が泳ぐごこが上手である、自分は馬に乗るごこが上手であるご慢心してツイ油断をするからである、だから修業の足らぬものは泳いでも大事をこつて深味へは行かず、馬に乗つても絶えず注意をして居るから滅多に過ちのあつた例はない。
十月二十四日

■四重と四軽………(揚子法言)

揚子法言に人ごして重んずべきごこ、軽んずべきごこを四つづつ説いて四重ご四軽ご云ふてある、四重ごは言を重んずべきごこ、行ひを重んずべきごこ、貌

を重んずべきごこ、好みを重んずべきごこの四つで、言葉重ければ法あり、行ひ重ければ徳あり、貌付き重ければ威あり、好む處重ければ必らず観るべきありご述べ、四軽ごは以上の四つを軽んずるごこで、言葉軽ければ愛を招き、行ひ軽ければ禁を犯して罪を招き、貌軽ければ辱しめを招き、好む處軽ければ邪淫を招くご。

十月二十五日

■口尙ほ乳臭し………(漢書)

漢王が韓信に魏を討たしにやる時に、近侍の一人に向ひ「魏の大將は誰れだ」ご尋ねるご其近侍は魏の事情を知つて居るものご見へ「はい、當時魏の大將ごなつて居りますのは栢直ご申すもので御座います」ご云ふご漢王は「ナニ、栢直、ハ、ハ、それなれば大丈夫だ、彼奴は口尙乳臭いから何うして我が韓信に當るごこが出来やう」ご云ふたのに初まつたものだが、世の中にまだ乳臭い學

問でありながらイヤに大家を取氣るものがある、甚だ氣障なものだ。
十月二十六日

■百禮の會、酒あらざれば行はれず……………(漢書)
酒は狂人水さへ云はれるものであるけれど又一方では百樂の長も云ふて
おる、漢書の食貨志に「酒は天下の美祿なり」と説き「福を祈り、哀を快け、
疾を養ひ、百禮の會、酒あらざれば行はれず」と書いてある、約まり毒にもな
れば藥にもなるのは酒だが、其酒を飲むにしても何うか毒よりも藥にするほご
に止めたいものである。

十月二十七日

■飢れたるものは食を爲し易く渴するものは飲を爲し易し……………
腹の大きい時には何んな御馳走でも餘りに望むころでは無いが、飢れた時に
……………(孟子)

は食を選ばず、不味いものでも甘味く喰へるものである。
十月二十八日

■大履成りて燕雀相賀す……………(淮南子)
大廈は大きな家のこと、大きな家が建つと、燕や雀は自分の爲めにも安全な巢
を拵へる處が出来たやうなものであるから互ひに悦び合ふと云ふ意味、所謂勿
怪の幸ひと云ふことである。

十月二十九日

■崑山の下には玉を以て鳥を抵つ……………(劉子新論)
崑山は玉の澤山ある土地のこと、玉の澤山ある處では玉も貴く無いものだが
ら玉を小石に易へて鳥に投げ付ける、物も尠いから貴く思ふが澤山あれば別段
貴くも思はぬものだ云ふた語だ、如何にも其通りで、著者が先年紀州の潮の
岬云ふ土地へ遊びに行つた時、其地方に鯨節を製造して居る處があつたから

見物に出掛けて行くに、澤山な鯉節の干した側に猫が座つて居つて、其家のもの等か平気で居るから「昔から猫に鯉節云ふくらいで、鯉節は猫にこつて何よりの好物に聞かすが、此んな處へ猫を置いておけば切角出来あがつた鯉節も猫の爲めに滅茶くんにされるでせう」云々「ナニ、大丈夫で御座います、此邊の猫は鯉節に慣れて居りますから喰ひ付くやうな心配は御座いません、夫れよりも困るのは雀です、雀は干した鯉節を啄いて困りますから猫を此處に置いて雀の番をさせて居るのです」云々云々であつた、猫が鯉節の番は嘘のやうだが夫れが事實だから面白い。

十月三十日

■鳥に反哺の孝あり、鳩に三枝の禮あり……

(古 話)

鳥は自分の育てられた親鳥を養ひ返し、鳩は親鳩の止つた枝から三枝下の枝で無くば止らぬものだそうだが、世に親に心配をかけ不孝なことをしたり、禮儀を

知らぬものは随分あるが、そんなもの等は宜しく鳥や鳩に愧ねばならぬ譯である。

十月三十一日

■病は小癒に加はる

(説 苑)

病氣の重き時は誰れしも養生をするから次第に癒くなるが、少しくよくなるに油断をするから又もや悪くなる、處世の途も是れと同じことで、苦しい時には一生懸命に稼業に精を出すから家運は次第に榮えて手許が寛かになる、處が手許が寛かになるに、困しかつた時のことを忘れてソロ／＼心に慢りが生じ、俗に云ふ咽喉元過ぎて熱さを忘れるに云ふ筆法で贅澤をやり出すから再び元の黙阿彌となつて苦しまねばならぬことなる。

十一月一日

■尊客の前に狗を叱せず

(曲 禮)

狗だけでは無い、客の前で下男や下女を叱るのも甚だ宜しく無い、世には客に對して何か不都合があつた云ふので、家人を客の前へ殊更ら呼び出して叱るものがある、是れは客へ對する云ひ譯ではあらふけれども、其客にこつても甚だ迷惑なものだから叱るこゝがあれば客の去つた後で篤云ひ聞けるが宜しからふ、彼の乃木大將が聯隊長の時代だ、時の陸軍郷が其聯隊へ馬車で營門を潜り、女關へ乗り付けたこゝがある、處が聯隊の營門は假令何人であらふこも馬車のまゝで乗り入るこゝが出来無いつて居つたから、元來剛直な乃木聯隊長は何うして我慢が出来やふ、其時營門に居つた歩哨の兵卒を早速其場へ呼びよせて散々小言を喰はした上で、制規の罰の内でも最も重きを以て處するこゝとなつた、無論其歩哨も營所の規定は知らぬではなかつたのであるけれども、相手は何分にも陸軍郷云ふので眞逆咎めるこゝも出来ず、黙認して通したのだ。

陸軍郷に於ても元來が自分の悪いのでもあり、且つは兵卒の胸の内も察したから、乃木聯隊長に向つて「イヤ、今日のこゝは乃公が悪いのだから何うか堪辨をしてやつてくれ」ミ口へ入れるミ乃木聯隊長は「閣下、折角ですが夫りや不可ません、如何に閣下は陸軍郷でも、規定は規定ですから少しも仮借するこゝはなりません」ミ益々小言を云ふ有様に、陸軍郷も耐わかねて早速其場を辞し、他の者に向つて「乃木も彼れほごまでにせずこよさそうなもの」ミホト／＼云ふた云ふ話はある、尤も是れは規則で固めた營所のこゝだから仕方はあるまいが、此んな場合、陸軍郷の腹の苦しかつたこゝを察するに餘りある。

十一月二日

■人事棺を蓋ほふて定まる……………(書言故事)

世の中の、人ミ煙草の善悪は、煙ミなつて後にこそ知れ云ふ古歌にもある通り人の價値ミ云ふものは生きて居る内には確ミ判らぬものだ、是れも乃木大將

の例をひくやうだが、明治大帝の御後を慕ふて潔よく自刃した乃木大將も生前には格別の評判も無かつた、三十七八年の役に、旅順口の攻撃に偉大な功をたて、其武名を天下に知られたことは云ふものゝ、日本海の大激戦で敵艦を殆んど全滅せしめた東郷大將ほどの武名は傳はられなうだ、それが死後……尤も殉死に云ふことで尙更ら世の耳目をひいたことは云へ、死後に於ける武名に云へば中々大したものであつた、いや、現今にも永世にも長く乃木大將の名は盡忠剛直の武將として傳はられるであらうが、是れ棺を蓋はて定まつたもので、煙草の善悪は見たゞけでは容易に鑑別がつかかねても、煙にして初めて判るのと同様である。

十一月三日

■人は萬物の靈………(書 經)

書經に「惟れ天地は萬物の父母、惟れ人は萬物の靈」こある、萬物の生物の内

人は最も其秀を得て居るから靈に云ふので、生命あるものは鳥に獸に、虫に魚に様々あるけれども、萬善を備へ、知覺の勝れたものは人以外他に見るこゝが出来無い、其内にも聖人は最も勝れたもので、最も靈なるものにしてある、處が此の萬物の靈が破倫な行ひをしたり、徳に悖り、人道に背くやうなこゝがあつては何うも萬物の靈にして自慢をする譯にはゆかぬから大いに我身を省みて常に慎しまねばならぬ。

十一月四日

■大道廢れて仁義あり………(老子)

太古の頃は悪いこゝをするものも無く、人は互ひに風儀が厚くて人の氣は和き窮民も無かつたから仁も要らねば義を稱へる必要も無かつた、然るに時代の變遷に共に世が進むにつれ此の風儀が次第に無くなつて悪いこゝをする奴も出来人を困らすものも出来て大道が漸く廢るやうになつたから、是れを矯める爲め

に仁義を以て誨への道をたてねばならぬやうになつたのは、罪を犯すものがあるから警察も要れば裁判所も要り、悪い奴を收容すべき監獄署も無くてはならぬところが、世に罪人云ふやつが全く其跡を断つたなれば警察官も要らねば裁判所も必要も無く、監獄署だつて無用の長物になつて仕舞ふ道理だ。

十一月五日

■生年百に満たず、千歳の憂を思ふ……………(文 選)

造物者が天地萬物を造つて生物には夫れ／＼成すべき事を授け、食物を定めた時に蜒蚰は慾深く然も苦勞性であつた見ゆ「モシ、私しは何を喰べることに致しませう」云ふ造物者は「フン、お前も虫の仲間だから草の露でも吸ふが宜しい」云ふた、處が蜒蚰は夫れで満足する様子も無く「或程夫りや結構なやうでは御座いますが、露云ふやつは何んだか便り無ふ御座いますから何うか今少し勝なものをも……」「夫れでは草でも喰べるがよい」「ハイ、草ですか

……何うも草云ふやつは冬になるに枯れて仕舞ひますが、草が枯れた時は何うしませう、眞逆喰べん居る譯には参りませんが……」「ちよつと、仕方が無いなア、夫れなれば土でも喰つてろ、土なれば年百年十無くなる心配はあるまいから」成程、土なれば大丈夫で御座いませう、併し世に喰べるほご恐ろしいものは御座いません、喰べるものには限りはありませんが、世の中の土は如何に多くとも限のあるものですが若し土を喰つて仕舞つた其後は何を喰べませう」云は随分大きなことを云ふたものだ、するに造物者は五月蠅でも思ふたものか「馬鹿ツ、お前の壽命は何日まであると思ふ、生年百歳に満たぬのに千歳の憂を懐ふ奴があるか、お前のやうな奴なれば目があるに益々慾が深くなるから今後は眼を見ぬやうにしてやる」「アモシ、そりや餘りにお慈悲が御座いません」「黙つて居ろ、生命のあるのはまだしものお慈悲だ、お前のやうな奴は乃公は知らんから勝手にしろ」云はれたので、夫れから後は蜒蚰に目が無くなり

勝手にしろ云はれた言葉に基づいて何方が頭やら尻やら判らぬやうになつた
云ふ昔話がある、尤も是れはホンの話に相違は無いが、併し此の語の意味
は云へば先づ此んなものである、世間には此の蜚蜚のやうな考へを抱いて居
る人は随分あるやうだが、眼を取られて勝手にせい云はれぬやうに氣をつ
けねばトんでも無い目に逢ふものである。

十一月六日

■巧偽は拙誠に如かず……………(説 苑)

詐は何れほぎ上手に云ふた處で矢ッ張り詐である、夫れよりも言葉不味くも
誠に限る、何んな巧妙な細工をして居つても質が鍍金なれば何れは剥けて見悪
く色の變るものであるが、細工は下手でも金を地金にして居れば何時まで經つ
ても價值の下がるやうなことは無い、そこで説苑では「智ありて私を用ゆるは
愚にして公を用ゆるに如かず、故に曰く、巧偽は拙誠に如かず」と説いて

ある、智あつて私を用ゆるは智恵あつて詐を云ふこと、自分勝手なことを
を云ふことで、愚にして公を用ゆるは、假令馬鹿であつても公明正大を本旨
とすることである、即ち是れを約めて云へば、智恵があつて自分勝手なことを
本意とするよりは、假令馬鹿でも公明正大を本旨とするには及ば無いと云ふ譯
となる。

十一月七日

■沐猴にして冠す……………(史 記)

此語に就てモ一つ引用すべきは「富貴にして故郷に歸らざれば繡を衣て夜行く
が如し」と云ふ語である、此の兩語の出所は關連して居るから次ぎにザツと述
べて見るに斯ふである。

秦が暴政の爲め國內に反旗を翻へしたものに陣勝、吳廣なぞ云ふものはあつ
たが、是れは失敗に終つて、それから間も無く秦王を故め討つたのは後に漢の

高祖かうそもなつた劉邦りうほう、楚その頂梁ていりやう、項羽けうう等であつた、其内そのうちに項梁けうりやうは討死うちじを遂げ、劉邦りうほうも項羽けううが愈いよいよ秦しんに迫せまつて互たがひに大功たいこうを收おさめたが、兩雄りうゆう並び立たずで、劉りう、項羽けううの兩雄りうゆう些細せさいなこころから衝突せうつうして將まさに同志討どうしうちの血ちの雨あめを降ふらそうこまてなつて僅わずかに納おさまつた、が併しかし剛毅こうきな項羽けううは夫それが爲ため内心ないしんは穩おだやかならず、俗ぞくに云いふムシヤクシヤ腹はらの八ツ當あたりて其銳鋒そのいほうを敵てきとする秦しんへ向むけたのだからたまら無い殆ほんど破竹はちやくの勢いきほひで秦しんの都みやこを屠ほり、降王かうわうの子嬰しゆいを殺ころし、宮殿きやうてんを燒やき拂はらひ、財寶さいほうを分捕ぶんぷり、始皇帝しこうていの墳榮ふんやうを掘かり返かへし、亂暴らんぼう狼籍ろうせきの限かぎりを盡つくして凱旋がいせんをしやうこするこ、項羽けううの音下おんかに居おつた韓生かんせい云いふ人ひと、項羽けううを引ひきこめて「此この土地ちちの様子やうすを見るに、地味ちみもよく、要害やうがいもよいから、此地こちに都みやこを構かまへて大いおほに天下てんかに雄飛ゆうひするが宜よろしからふ」云いふこ、項羽けううは自分じぶんが亂暴らんぼうをして燒捨やますてながら「此こんな燒やけ果はてた土地ちちを何なにうして都みやこに出來でるものか、夫それよりも早く故郷こきやうへ歸かへつて、自分じぶんが斯かく立派りっぱな大將たいせうとなり、此度このたびの雄名ゆうめいを故郷こきやうのものに見みせぬ

らかすのが何なによりの樂たのしみだ、富貴ふうきにして故郷こきやうに歸かへらざるは恰まさで錦きんを衣きて夜歩よほくやうなもので何なにんになる」云いふ韓生かんせいの言葉ことばを一言ごんの下もとに斥しりぞけた、約つひまり項羽けううには天下てんかをこつて何なにうしやうこ云いふ大きな志こころざしが無く、僅わずかに郷黨けうたうから賞ほめられたり羨うらやむがられたりするのを第一だいいちの目的もくてきとして居おつたものらしいから、韓生かんせいも愛想あいそを盡つくして「なツ、なーんだ馬鹿ばかくしい、人は楚人そじんを沐猴もくこうにして冠くわんすこ云いふが全く其通りだ、項羽けうう如ごときが何なにが出來でるものか、彼あれこそ沐猴もくこうにして冠くわんしたものだ」云いふ韓生かんせいの言葉を聞いた項羽けううは氣きの立たつて居おるこころへ元來がんらいが短氣たんきな性質しつだもの何なにうして許ゆるしておかふ「已おのれ無禮ぶれいな奴やつ」云いふやうなこころからト

十一月八日

韓生かんせいを殺ころして仕舞しつた。

父母ふぼの根元こんげんは天地てんちの命令めいれいにあり、身体しんたいの根元こんげんは父母ふぼの生育せいよくにあり、子孫しそんの相續そうぞくは夫婦ふうふの丹精たんせいにあり、父母ふぼの富貴ふうきは祖先そせんの勤功きんこうに

あり、吾身の富貴は自己の勤勞にあり、身命の長養は衣食住の
 三にあり、衣食住の三は田畑山林にあり、田畑山林は人民の勤
 耕にあり、今年の衣食住は昨年の産業にあり、來年の衣食住は
 今年の艱難にあり、年々歳々報徳を忘るべからず……(二宮尊徳)
 二宮尊徳の報徳訓にして世に傳へられて居るものは是れである、一々説明を附
 する要はあるまいが、取りわけ此内で我れ々の學ぶべきは今年の衣食住は昨
 年の産業にあり、來年の衣食住は今年の艱難にあり云ふ項で、來年のこゝで
 無くとも、人は明日のこゝを今日からチャーン準備を整へておく心掛が無く
 てはならぬ、今日のこゝを今日になつて慌て、調へるやうでは何日も心の忙し
 いばかりか、トモする目途が外れて口をアングリさせなければならぬこゝが
 起る、早い例をあけて見るに、腰辨先生が其月に受くべき俸給を以て其月の生
 計の費に充て、居る人がある、是れ等は此の報徳訓に背いたもので、その月末

に受くべき給料を充にして居れば物を購求めるに勢ひ掛け買にせねばならない
 掛け買にするに多少は高價いものを買はねばならず、又多少の不自由を忍ばね
 ばならぬこゝもなつて見す、不利益な譯だ、いや、そんな不利益は尙忍ぶ
 にしても人間云ふやつは不時の備へが無くてはならない、何時何んなこゝが
 湧いて出て掛け買に出来無い金の必要が無いとも云へぬ、そんな場合、月末に手
 に入るべき俸給を目途にして居る餘裕も無く非常に苦しむこゝのあるものだけ
 ら來つて初めて用意にかゝるよりも來るべき用意を豫じめ調へておかねばなら
 ぬ。

十一月九日

■白梅檀馥らざるにあらざれども、焉んで能く風に逆らはん……
 ……………(世説)

白梅檀の香りは中々に強いものであるが、風に向つては遠く達するこゝは出来

無い、人世に於ける凡てのこころも此通りで、人心の腐乱した場合には正義を喧しく稱道した處で、世人の耳目をひくこころは容易なこころでは無い。

十一月十日

■人其子の悪きを知ることなく、其苗の碩なるを知ることなし………(大 學)

人には慾目のあるものだ、自分のものは可愛のは誰れも人情である、自分の子供が他家の小供に喧嘩をするやうなこころがあるに、親としては相手の小供が悪いやうに思ふ、自分の息子が茶屋費ひをするやうになるに、吃度其友達を怨んで「誰れ〜が私の悴を伴れ出した」なんこか云ふ小言は随分こ耳にする處である、然も其眞想は云へば、當の伴れ出された云ふ悴クンは反つて他所の息子を伴れ出して居るこころにお氣のつかれぬのは親心である。それかと思ふこ他所の放蕩息子が、人前だけを飾つて神妙にして居るのにお氣が付かれず、其

親に向つて「お宅の誰れ〜さんは誠によく出来た方だ、誠にお羨ましい次第で御座います、宅の悴なんかチツと見習へし始終申して居るこころで御座います」が「云ふ一方では自分の息子に向つて「何處〜の何さんを少しは見習ふがよい、お父オさんには少しも心配をかけず、家の爲めに中々なつて居るやうだ」なんかんこ意見の種にする、處が何んぞ計らん、賞めておる相手は放蕩息子だもの、そんなものを見習ふては大變であるが、そこは「其苗の碩なるを知ることなし」で所謂人の花は赤いの譬へ同じこころである、尤も此の語の字義から云ふに、放蕩息子の例では無く百姓の例をあけたものだ、百姓が自分の植へ付けた苗の大きくなるのに氣が付かず、人の畑にのみ目がついて其苗も大きいやうに見ゆる云ふ意味だ。

十一月十一日

■名は實の賓………(莊 子)

何物にも名がある、名があれば實があり、實があれば名がある、煙草云ひ、酒云ふのも名だ、處が煙草云ひ、酒云ふのも、其物品があるから名も添ふて出来るのである、何んにも無いものに名の付けられる筈は無い、それでは化物か幽霊か云ふのは世の中に無いものなのに何んとして名があるか云ふ疑問が起るが、世間には實際に無くとも、人は仮りに拵へたものがある、幽霊云へば足の無いもの、化物云へば三ツ目入道なんか云ふのは取りも直さず其物品を意味したもので、架空の説は云へそんなものがあるから幽霊、化物云ふ名も生じるのだ、斯んな風で事實にしろ架空にしろ一つの物品が無ければ名の起るものでない、だから一の物品、即ち實は主なるべきもので、名は主に添ふて出来るものであるから實の賓云ふたのである。

十一月十二日

■名實當る無し……………(祖庭事苑)

名の序に今一つ名に就いて此の語を選んだ、祖庭事苑に此の語に就いて斯ふ書いておる、肇法師云ふ、夫れ名を以て物を求むる、物に名に當るの實無し、物を以て名を求むる、名に物を得るの功無し、物に名に當るの實無ければ物にあらざるなり、名に物を得るの功無ければ名にあらざるなり、是れを以て名は實に當らず、實は名に當らず、名實當る無し、萬物安にかある矣、清凉國師云ふ實則ち名ならば面を見て即ち名を知るべし、若名即ち實ならば火をよべば即ち口を焼かん云々

是れなんかは随分極端な話だが、名實は伴はねばなら無い、眞逆百姓の息子に六かしい名をつけるこゝが出来ねば、されば云ふて權門の若様に田吾作だとか太郎兵衛なんか安ッポイ名をつけるのもあるまい、現今八釜しく云ふて居る哲名學云ふものも約まる處がこんなこゝから出来たのだらふ。

十一月十三日

■ 梁上の君子……………

(古語)

斯ふ云ふ立派な聖人が何かのやうに聞ゆるだらふ、是れも前の章に述べた名實當るなし云ふ譯だ、梁上の君子云ふた處で聖人でも無ければ君子でも無い、其實を云へば夜盜クン、即ち泥棒のこゝである、泥棒に向つて仮にも君子の名を附けるのは異なやうだが、是れには故事がある、いや、泥棒に故事なんか云ふ愈よ可訝しく思はれるけれども故事は矢ッ張り故事に相違は無い、昨今は寒さに向つて泥棒のソロソロ、跋扈する時季だから此の語をひいて所謂故事を述べて見るに斯ふである。

後漢の代に太公云ふ土地の長になつて居つた陣寔云ふ人があつた、才徳兼備した人であつたから其土地も中々善く治まつたが、或夜此の陣寔の邸へ一人の泥棒が忍び入つて梁の上に隠れ、家人の寢靜るのを待つて居つた、處が其梁云ふのは陣寔の居間の天井の梁であつたのだから、目敏くもフイ目をつけ

た陣寔はソ知らぬ風で何氣無く家人の者等を其居間へ呼び集めて様々な教訓話をやつた、尤も夜中に此んなこゝをやつたのを前例はあるまいが、何さま才徳兼備の人だから時々家人のものを集めて講話會を開いたものに見ゆる、また家人等も折角寢た處を起されて迷惑だつたらふが、主人の云ふこゝだから仕方が無い、眠いのをデツシ耐へて聞いて居るに、陣寔は一段シ聲を高めて「さて、人間云ふものは性は善なものであるけれども悪いこゝをする奴はフトした心得違ひが初まりで夫れから次第に増長をするのは、白紙へ一点の墨を落したやうなもので、夫れも一点だけなれば使ひ方によつて其上に文字を書けば消ゆるこゝはあるけれども、次第に増長して墨が大きくなれば其紙は全くの反古で使ふこゝも出来なくなる、云ひ換へれば悪事の増長した奴は人間の反古だ、現に此の梁上に居る君子の如きも取りも直さず其反古の一人である」云梁の上を指さしたのだから、梁上の君子クンたまらなく無つたものに見ゆる、ヒラリミ飛

んで下り、家人等の立ち騒ぐに目もくれず陣寔の前へピタリミ手をついていろ
 く、自分の悪事を懺悔し、罪を詫びたから陣寔は後來を懇に戒しめて若干か
 の金品を與へて歸した。云ふこころがある。泥棒を梁上の君子云ふこころは是れ
 から始まつたが、普通のものなれば梁の上に泥棒が居る。見る。大聲でも立て
 、「そら泥棒だ、早く警察へ電話をかける、棒を持つて来い、早く縄を持つて
 来てフン縛れ」なんか大騒ぎをやる處たらふが、流石は陣寔だ、梁上の君子
 ミ云ふ尊稱を以て迎へ、後來を戒める處に寛大な度量がある、如何に泥棒は
 云へ罪を悪んで人を憎まずで、教訓をして改心する奴なれば改心させて善道に
 導びくのは君子のすべき業で、警官に引き渡して懲戒するだけをして得たり。こ
 するわけではあるまい、云ふて著者は泥棒に近のものがある譯では無く、
 また其場を免れて再び悪事を働くやうな圖々しい奴は警官ごころか、昨今の野
 犬同様、撲殺をやつても飽き足らぬほごだ。

十一月十四日

■人木石にあらず……………(文 選)

木石には情の無いものだが、人には喜怒哀樂もあれば感情もある、峻烈深酷な
 法官に血も涙もあれば、兇惡な無賴漢にも一通の情が無いでも無い、だから誠
 心を以て事に當り、言葉を盡せば何んな人でも動かされるものである。

十一月十五日

■命は義によつて輕し……………(後漢書)

人間は感情の動物である、金錢を以て動かす。この出來ぬ人でも情によつて動
 く、然も情によつて動く人は慾徳づくでは無いから赤心を以て事に當るもので
 ある。「君恩重く、命は鴻毛よりも輕し」云ふ聯句もあれば「義理の柵、情
 けの枷」云ふ俚諺もある、そこで後漢書の朱穆傳に「情は恩の爲めに使はれ
 命は義によつて輕し」記されてある。

十一月十六日

■股を割きて腹に啖はしむ……………(貞觀政要)

太宗侍臣に云ふて曰く、君ごなるの道、必ず先づ百姓を存すべし、百姓を損なひ以て其身に奉ぜしむるは股を割きて以て腹に啖ふが如く、腹飽きて身斃るご云ふのは貞觀政要にある文句だが、現今では股を割いて腹に啖はして居る官吏や實業家は随分ごあるやうだ、其内にも早い例をあけて見るご、紡績會社なんかで工女虐待ご云ふやうなごこか時々新聞の雑報に上るごごがある、一面から見るご工女は會社のお蔭で飯を喰つて居るのだから酷くコキ使はれても仕方は無いやうなもの、併し會社の利益は何から得るかご云へば無論器械の運轉によるもの、工女がセツセご仕事をやるからである、云はゞ會社の財源は工女からご云ふてもよい、然らば其工女に仕事を勵ます一方では大切にして慰安の途を與へねばならぬ筈を、工女に怨言を吐かすご云ふやうなごこは間接に會社の

不利益を來し、所謂股を割いて腹を飽かそうごするやうなものだ、いや、是れは紡績會社だけでは無い、大は内閣の瓦解から小は一家の倒産にも股を割いた結果に起因するごごが尠くない、上に立つもの、注意すべきごごだ。
十一月十七日

■獸を得て人を失ふ……………(古 諺)

國ご國ごが戰爭をして互ひに極力兵を交へた末、漸く勝敗が定まつた處で國力をあけて其爲めに費したのだから、勝つたごこで國民が非常に疲弊をし居る相手方の方から償金を取らふにも相手の方も疲弊のした揚句だから出すべき償金が出来ない、夫れではご云ふので領土を割かしたごこで此方から夫れを治めるに就ては矢ツ張り先立つものは金だが、其金は政府にもなければ公債を募集したごこで夫れに應ずる餘力は無く、結局戦に勝つても善後策の出来ない破目に墮るご云ふやうな意味である。

十一月十八日

■之を道くに政を以てし、之を齋ふるに刑を以てすれば民免れ
て恥なし、之れを道くに徳を以てし、之を齋ふるに禮を以てす
れば恥あつて且つ格る………(論語)

民免れて恥なし云ふのは、人は恥を恥とも思はぬやうになる、廉恥心云ふ
のが無くなつて人間が厚顔しくなる云ふ譯だ、そこで此の語の全体から云ふ
と、國に政を布き、人民を法律なんかで厳しく責めつけるやうな事になるこ
人民は其法律を濟る方法を考へていろ／＼の悪いことをして「なーに、法律に
よつて罰せられなんだなれば何をしても構ふものか、人の善悪は法律が標準だ
」なんか破廉恥な行ひを平氣で行ふやうな事になつて道德などは眼中に措
かぬことゝなるが、徳を以て懐け、禮を以て導くやうにすれば「成程、是れは
不可ない、此んなことをやつては道に脊く譯だ」少しの事でも自分自分

の心を責めて戒めるやうになる云ふ意味である。
如何にも其通りで、昔の法律などの充分制定されん内は、人の心が丸かつて僅
かな事でも非常に恥した事である、現に古老の話に、づつ昔は金の貸
借に抵當なんか云ふやうなものは取らなんだ、それも人間がだん／＼悪くな
つたので一枚の證文を取るやうになり、夫れから抵當云ふやうな譯で証文の
文面へ一つの條件を書くやうになつた、そして其條件は何か云ふと、萬一
期限までに借用の金子が辨金の出来ぬ時には道端でバツこお笑ひ下されたく云
々云ふのが主意であつたそうだが、云ふ迄も無く、萬一債務者が借金を返すこ
この出来ぬ場合は四辻へ其證文を持つて行つて「誰れ／＼が自分から貸した
金子を返さない、何ん信用の出来ぬ人間では無いか」テな事で笑つて帳消
にした云ふやうな事だ、借金が笑はれただけで帳消になる云ふ可訝し
いが昔は夫れですら大變な恥したものと見ゆる、處が現今の人間なればそん

なごころは屁ごも思はず、法律を楯にこつて裁判所へ持ち出しては磨つた揉んだの辨論もやり、旨く先方に糞をかけて得意かつて居るものもあるくらいだから笑はれたゞけで借金が帳消にされるご云へば悦んで金も借り、笑はれるのも待つて居るくらいだらふ、さればご云ふて根本的道德本位で國を治めるごが出來ねば、時代の變遷にも伴なはねばならぬから、要は道義を経こし、法を緯こするにある、只だ經緯を顛倒するごせんによつて大變な相違の生ずるものであるから上に立つものは氣を付けねばならぬご教へられたのは此の語であるご思ふて居れば間違ひは無

十一月十九日

母に取り入らんとすれば先づ娘に賄へ……………(セキスピア) 將を得んごすれば先づ馬を得よご云ふのご同じ意味である、目的のものを得やうごするには其物の弱点を捉へるに限る。

十二月二十日

月かげのいたらぬ里はなけれども、ながむる人のこゝろにぞすむ……………(法然上人)

物は見やう見まねで何んごでも考へやうのあるものだ、雲間に冴ゆる月は一つだが、それを以て「ア、よい月だ」ご楽しんで見て居るものもあれば「ア、彼の月、彼の月を故郷で眺めたなれば何れほご楽しいだらふ、今は斯く異郷の地に居るが……」ご望郷の念にかられてホロリご涙を落すものもあるだらふ、其他境遇によつて月を眺める感想は夫れく違ふものである。

十二月二十一日

百金は貯ふべしと雖も一金を貯ふるは難し……………(古 諺) 茲に云ふ百金、或ひは一金は其金高を定めたものでは無い、百金は多額の金子、一金は僅かな金子のごごだが、金を貯めるのは最初の間は中々に六かし

いものである、一金、即ち僅かな金子は誰れしも軽く見て仕舞ふから「僅か
れッばかりのもの」云ふやうな觀念から格別大切にもしないが、夫れが積
積んで少しく殖ゆるに次第に大切にするやうになり、既に百金もなる最早虎
の子のやうに考へて容易に費ふ氣も起らず、ヂツ貯めておくから利子が次第
に出来て益々加はる一方なるものだ。

十一月二十二日

■心誠こころまことに之これを求めば、中あたらずと雖いひも遠とほからず……………(大 學)
人の一心しん云ふものほぞ恐ろしいものは無い、何事なにごとでも一心しんになつて事に當れ
ば必ず成功するものだ、假令成功せずとも所謂當らずとも遠からずで殆んど其
域に達するここが出来るものである。

十一月二十三日

■誰たれか鳥からすの雌雄しゆうを知らん……………(詩 經)

鳥からすの雌雄しゆうは何方ごうちも同じやうに黒いから見分るみわけここが容易やういに出来無い、人は「俺
れは聖人だ」「俺れは豪いぞ」自慢じまんの水掛論みづかけろんをやつて居つた處で實際じつさいの技量ぎりやう
見ねば果して聖人せいじんの資格しきかくがあるか何うかが判るもので無いのは鳥からすの雌雄しゆうと同じ
ことである。

十一月二十四日

■雀虎すずめとらの口くちに入る……………(雀 經)
或處あるところで一尾びきの虎とらが獸けものの肉にくを食ふたのが何うした拍子へうしか其骨そのほねが齒はの間に挟あはまつて
何うしても取れない、それが爲め物を喰くはふと思へば痛むものだから食事しょくじも祿
々ろくろくするここが出来ず、次第しだいに飢うれて今は飢死うじにをせんばかりになつて居つた、處
が或日あるひフイミ目の先まきに雀すずめの遊あそんでるのを見て「やア雀君すずめくん、俺れが一生せうの頼たのみが
ある、何うか聞き届きとどけてくれまいか」涙なみだながらに云ふ言葉ことばに雀すずめは「頼たのみは
何んなことです」「外ほかでは無いが、俺れの齒はの間あひだへ獸けものの骨ほねが挟はさまつて痛いたくて仕方

が無い、それが爲めに此の數日食ふものも食へないやうな有様だから、何うか俺れの生命を助けると思ふて其骨を抜いてくれ、其代りお禮として今後肉のあるところにお分配をするところにするから」ミサモ憐れッほう云ふものだから雀は早速承知をして虎の口の中へ飛び込み、漸くのところに其骨を啄き出したので虎は大悦びで其場を去り、口の中も工合がよくなつて其後は相も變らず食物を獵つて居る。例の雀だ、或日のここに木の枝から「モシ虎さんく、此間のお言葉によつて其肉の一片でもよろしいから私にお分配をして下さい」云ふ。虎はギロリ目をむいて「何んだ、汝雀の癖に生意氣なことをぬかすな、俺れの食物を分配しろなぞは無禮千萬な奴だ、俺れが何んの因縁あつて汝に肉を分配せねばならぬところがある、先づ夫れを云へ、迂闊な云ひ掛りなぞをぬかしては許さぬぞ」ミ大變な權幕だから雀は驚いて「そッ、それは約束は違ひます、現に此間獸の骨が齒の中へ這入つてお困りの處を私しが……」ミ皆まで

間かず虎はいよく眼を光らして「馬鹿ッ、其時に俺れが助けてやつた恩を知らぬか、雀の分際を以て俺れの口中へ這入つて無事に出られたのは汝の名譽だ。彼の時に俺れが口を塞いで了つたら汝は何うする、眞逆今日まで生きて居ることは出来まい、それを幸ひに思はぬか、罰當りめ」ミ取つても付かぬ返答に雀は怒つて見たもの、相手は相手だから残念ながら仕方が無い、其場は飛び去つたが、此の事が無念骨髓を徹して居る……ミ云へば大層だが、雀としては確かに怨みは骨髓に徹して居つたらふ、それで其後虎の様子を窺ふて居る。或日虎は肉にも飽いたか快けに睡つて居る様子に、好機逸すべからず悦んだ雀は早速其側へ飛んで下り、嘴を以て虎の両眼を滅茶く々に啄きまはして逃げ去つた。云ふ話がある、世の中に此の虎に似たやうな人間は尠くないが、相手が小であらふことも恩を受けた者を欺くやうなことをしては不可ない。

十二月二十五日

■不用の物を買ふ時は有用の物を賣らざるべからず……(西 諺)

世の中に不用のものは無い筈だが人世には贅澤物は不用に見ねばならぬ。贅澤物を身に附ける人は生活状態も凡て是れに準ぜねばならぬから財を散するところが夥たしく遂には産を破つて有用の品までも金に代わねばならぬこととなる。

十一月二十六日

■須らく人情の常なるを知るべし、方に人を料理し得……(陸象山)

人の心は様々なものだが、其人情の常なきを知るこが出来たならば、人を使ふことは何んでも無い。

十一月二十七日

■仁者は難きを先にし、獲ることを後にす……(孟子)

普通の人間は得ることを先にして難きことは後にするだけなればまだしも、時によれば捨て、仕舞ふ横着者もあるから不可無い、捨てぬにした處で易きこと

十一月二十八日

■喜來る時一點檢し、怒來る時一點檢し、怠墮の時一點檢し、放肆の時一點檢す、是れ省察の大條款なり……(新吾呂)

を先にやつて仕舞へば後からすべき難きことは益々難くなるものだ。
一點檢は一度振り返つて見るこ、即ち省みるこである、時に應じ事に當つて必ず一點檢をやつて居れば世に立つて間違ひの起るものではない、殊に人の情として大なる喜びの時、大なる怒りの時には後先を忘れたがるものだから是非こも一點檢せねばならぬ、諺に事に當つて雪隠へ這入れ云ふこがある雪隠へ這入れは臭い外は仕方の無いやうなものだが、心を落ち付けるには臍下丹田云ふて臍の下に力を入れジツと氣を濟ますのは悟道の法云ふこだ、さすれば雪隠へ行つて力んで居れば自から下腹に力の這入るものだから心も落ち付き思案の浮ぶものを見ゆる。

十一月二十九日

■徳行は香氣の如し、是れを碎けば益々芳し……………(ペーコン)
管々しく説明の要はあるまい。

十一月三十日

■立志の功、耻を知るを以て要となす……………(至言録)
耻を知れば身の行ひを慎しむ、身の行ひを慎しめば品性も高くなり、世の信用も出来て望みも遂げられるものである。

十二月一日

■身忙がしければ心を静かに持て……………(エマルソン)
誰れでも多忙な時は心も落付ぬものだが、心が落付かぬ忙かしの事務に必ず間違ひの生ずるものであるから、忙がしい時ほご心を冷靜にもつて事務に當らねばならぬ。

十二月二日

■一犬形に吠ゆれば百犬聲に吠わ、一人虚を傳ふれば萬人實を傳ふ……………(潜夫論)
「今度誰れ〜が大變な金を儲けたそうです」「エツ、眞實ですか」「眞眞も嘘もありません、夫れですから現に彼の住居なんかも今度大變な修繕をやつて居るでせう、常々から彼の吝ん坊が、彼んな普請をする處を見ても判るぢやありませんか」「成程な」云ふやうなことで聞いた人間が又他へ行つて其話をする然も二度目の話には吃度尾緒のつくものだ「モシ、今度誰れ〜が大變な金を儲けたそうです、株の方で旨く當つて何んでも百萬圓近ふ儲つたそうですから今度五萬圓ほごで家を建て代るそうですが大したものぢやありませんか、なに此の話は甚兵衛さんから聞いたのですもの間違ひはありませんや」「へーん、そりや素晴らしいものですな、成程〜、甚兵衛さんなれば先方へ始終出入りを

して居るから實眞でせう、何んしろ人のここだが豪いもんですなア」云ふやうなことで珍らしいことを云ひたいのは人情、又聞きものは更らに他へ行つて珍らしそうに其話しをするに聞いたものはまた他へ云ふ、斯んな風で八方へ廣がつた噂の主が果して金を儲けたか何うだか探つて見るに、其家を今度、都合によつて秘密で他へ賣り渡したところが、買主の方で規模を大きくして、改築するここになつたのだ云ふやうな話は、所謂一人虚を傳へて萬人實を傳ふである。

十二月三日

■衣食足つて禮節を知る……………(古 諺)
友人の家に悦び事がある、祝を持つて行きたいが折悪く祝ひ物を買ふべき金が無い、何處へ招待されて是非に行かねば濟まんが、平素服で眞逆出掛けることもならず、いや、平素服では失禮だ、されば云ふて紋服の持ち合せは無

く、はて困つたなんか云ふ例は世の中の中流以下には見聞する處だが、是等は衣食足らぬから己を得ず禮節に悖るやうな譯である。

十二月四日

■人は自己の身を以て第一の帮手と爲すべし……………(スマイルズ)
世の人は人を便りにするから間違ひも起り思惑も外れるものである、自分の他に便りとするものが無いと思ふて居れば過ちは無い。

十二月五日

■尺も短かき處あり、寸も長き處あり……………(史 記)
長持は枕にならず火吹竹は物干竿にならぬに同じく、物事には夫れ相應の使ひ途があれば人にも夫れく得意に不得手もあるものだ。

十二月六日

■心は逸すべく形は勞せざるべからず……………(有心雜言)

逸は愉快なこころ形は身体のことである、心は何日も愉快に持つて居らねばならない、心の内に蟻があり、不愉快であれば學問を習つても覺へることは出来ず、事務に就いても撈取らぬものである、だから身体は常に働いて居ても心は愉快に持つて居らねばならぬ。

十二月七日

■儉より奢に入るは易く、奢より儉に入るは難し……(張知白)
宋の宰相に張知白云ふ人があつた、宰相云へば一國の大官だが、至つて節儉家であつたから或人が「失禮ながら貴下ほどのお身分になれば左程まで御儉約に及びますまい」云ふに張知白は「成程、身分の俸給だけのことをすれば夫れや随分贅澤なことをやつても差支へはありますまい、併し儉から奢に入るのは何んでもありませんが、一旦奢つた暮しをした上は節儉をするこころは中々容易なこころではありません、それで自分は兎も角、妻子に奢の癖をつけたな

れば、自分の亡き後で必ず困難するこころもあらふと思ひますから儉約を守つて居るのです」云答へたそうである、實際此の通りで、不味いものを喰つて居る人間が甘味いものが食膳に上るに舌鼓をして食ふが、常に旨味いものを喰つて居るものに不味いものを出したこころで箸もつけるものではない。

十二月八日

■沃度の民は材ならず、淫すればなり瘠土の民は義に嚮はざる……(敬 姜)

魯の國の公父文伯云ふ大夫が或日朝廷から退つて母の機嫌を伺ひに出るに、母の敬姜云ふ人は糸を紡いで居つたから公父文伯は何氣なく「母上、お手づから何もそんなこころを成さらずとも宜しいでは御座いませんか、左様な業は、こころ皆まで聞かず母の敬姜はキツコなつて「夫れは何んこころを云ひなさる、其方の考へでは妾しが斯様な業をせずとも差支へはあるまい云ふので

ありませうが、仮りにも大夫の官位を持つた其方としては大變な心得違ひである、如何にも妾の身分としては其方のお蔭で遊んで居つても不自由はありますまい、けれども世には冥加云ふこゝごがあります、如何に食べるこゝごに不自由が無い云ふて遊んで暮して居つては冥加に盡きるこゝごが判りませんか……」

云ふこゝごから淳々説いたのは勤儉云ふ一事に就てあつたが、其内に此の語を以て例をあけた、語の意味は不自由の無い國には人材は乏しい、それ云ふのは遊んで居つても樂に暮せるものだから學を修め腕を磨かふ云ふものは無く、ツイ懶けて仕舞ふに引き代り、瘠土、即ち貧乏な國の人民は遊んで居つては喰へない處から自然に稼業に勵み、よく働くものである云ふこゝごになる。

如何にも其通りで金満家には放蕩息子が出来るが、貧乏な家から立派な人材の出した例は昔から尠く無いのも其原因は是れである。

十二月九日

■石中に火あり、打たざれば出でず、人中に佛性あり、修せずんば顯はれず……………(岩宿和尚)

珠磨かざれば光なし云ふ古諺と同じ意味である、礫石の火は金を打ち合ふから出るが、打たずに居つては何日まで経つても火の出る例は無い、夫れと同じく人間も學問をせねば智識の啓發は出きず、修養せねば深く徳を積むこゝごは望まれない。

十二月十日

■底ひなき淵やは騒ぐ山川の淺き瀬にこそ仇浪は立て…(素性法師)

人の心に迷ひの生ずるのは信念が淺いからだ、修養が足らぬからだ、修養も積み、斯ふこ思ひ定めたなれば決して心に迷ひの出来るもので無いのは、深い淵には波も立たぬが、淺い瀬に波のたつやうなものである。

十二月十一日

■名聞の心存すれば至らざるなり……………(山鹿素行)
 人は見外を飾り、心を銜ふやうでは充分に望みを果すことが出来無い、金儲をするにしても夫れである、善い着物を着て懐手をして居るやうでは正常な金儲も出来ず、ツイく悪いことをやるやうなことになる、俗に云ふ汚ふ働いて美しく喰へは是れだ、云ふて汚ふ働けは悪いことをして不淨の金を儲よ云ふのでは無い、外面を飾らず身を粉にして働け云ふ意味だ。

十二月十二日

■千早ふる神の心も月なれや、詣る心の内に映らふ……………(中江藤樹)
 神の心に私しは無い、其清いこころは玲瓏玉の如き月のやうなものである、只だ參詣する人々の心によつて神云ふ觀念がいろくこ沸くものである。

十二月十三日

■見聞は多きより存し、言語は稀なるを欲す……………(中村敬宇)
 見聞の廣ければ廣いほど徳があるが、言語は多いほど損のあるものだから氣をつけねばならない。

十二月十四日

■鹿をさして馬と云ふ……………(十八史略)
 奏の趙高が中丞相の地位に居る時のこころである、元來が野心家だから、宮中に仕へる群臣を常々籠絡をして居つたものゝ、今一つ自分の權威が何れほごあるか試して見やう云ふやうな考へから或日一疋の鹿を二世皇帝に献上して「臣趙高、謹んで稀代の名馬を献上致します」云ふ真面目にやつたものだから皇帝はカラ／＼笑つて「丞相、其方は何ん云ふこころを云ふ、是れは鹿では無いか、鹿を持つて来て馬は何んのこころや」云ふのを皆まで聞かず趙高は「恐れながら是れは確かに馬で御座います、此んな鹿は臣不識にして未だ嘗て見

たここは御座いません」ミ駄目を押した、中々圖々しい押の強い人であつたこ
見ゆる。

處が皇帝もアマリ博聞云ふ方で無かつたから趙高から斯ふ駄目を押して云は
れて見るミ多少の疑ひが起る「はてな、世には彼んな馬もあるものか知らん、
何うも見た處では鹿に似ておるが……」似ておるどころか眞實の鹿だが、そこ
がお芋の煮わたの知らぬ哀しさ、趙高の道具に使はれるミ知らぬものだから
左右の群臣を見返つて「朕は彼れを鹿のやうに思ふが其方等は何うぢや、矢ッ
張り馬か」ミ尋ねられるミ、群臣は皇帝ミ趙高の顔を見比べて「ハッ」ミ頭を
下げたまゝのものもあれば「左様で御座います、何うも馬のやうでもあり鹿の
やうにも心得まする」「いや、某しは馬かミ心得まする、馬も馬、牝馬で御座い
ませう、近頃馬も中々贅澤になりました頭へ角ミ云ふ響を挿したので御座い
ませう、まア彼れなんか馬の内でも新しい馬、虚榮にかられた馬、ハイカ

ラ馬ミでも申すので御座いませう」ミ眞逆には云ふまいが、眞實以て人を馬鹿
にした返答をするものもあれば中には「確かに鹿で御座います」ミキツバリ云
ふたものもあつて何方もつかずに其場は終つたが終らぬのは趙高の胸の中で
あつた「俺れの説に賛成をして鹿ミ云ふたものは意に適ふたが鹿ミ云ツ張つた
奴は怪しからん」ミ云ふので正直に云ふたものこそ災難である、其後間も無く
罪を拵へて夫れく罰せられた、語は是れから始まつたものである、尤も馬鹿
ミ云ふのは是れに起因したが何うだか詮索の限りでは無いけれども、兎も角も
馬鹿くしい話である。

十二月十五日

■理想は遠きにあらず先づ手近より始むべし………(カーライル)
人は空想にかられて及び難いやうな理想を抱くが、理想よりも先づ手近のこ
から整理してゆくに限る、身の周邊を整へず及び難い理想にのみ憧れて居るや

うでは遂に華麗の瀧に身を投るやうな愚を學ぶに至るこころなる。

十二月十六日

■世の中を渡りくらべて今ぞ知る、阿波の鳴門に波風もなし……

……(物茂郷)

世渡り云ふのは六かしいものである。こ述べたものだが、六かしいから云ふて氣を挫いて仕舞へば益々六かしい、六かしい瀬戸に立ち至つて愈よ心を固くすれば案外樂に渡れるものである。

十二月十七日

■智者には一言にて足る……(リチャード)

智の無いものには考へる餘地が無いから淳々々説き聞さねば判らんが、智者は所謂一を聞いて十を知るで、愚者に數千言云ふべきことを一言にて覺るこころが出来る、智者に對して縷々言葉を盡すは愚の至りである。

十二月十八日

■七縦七擒……(十八史略)

漢の丞相孔明が南夷を征討に向つた時、敵の大將孟獲云ふのを擒にしたが、孔明は寛量な名將だから是れを殺さない、殊更ら味方の陣形を見せて「何うだお前も南夷の孟獲云へば多少知られた武將だが、此方の陣形を見て何う思ふ」云ふと、孟獲は又負惜みの強い性質だから「アハツ、俺れは虚實が判らなんだから無残く捕虜になつたが、此んな陣形だつたのなら勝つのは何んでも無かつた」云ふ大言を吐いた、そこで孔明は「面白、それでは今度は逃してやるから見事此方の陣を潰して見るがよい」云ふ放してやる、孟獲は早速勢を纏めて攻め寄せては来たが、智謀の縦横に溢れた孔明には何うして勝てそうな筈は無い、又しても捕虜になつて「アハツ、何うぢや、此方の陣が旨く潰すこころが出来たな」云ふなッ、な一に、今度の戦は俺れの方に天運が無かつたのだ、昔

通なれば何うして負けるものか」「ハ、それでは今一度逃がしてやるから普通で来るがよい」こ再び逃がしてやつた、いや、再びでは無い、それから又もや捕はれて逃がして貰ふ、逃げて更らに押し寄せる、今度も捕虜になるこ云ふやうな有様で恰三七度繰り返したから七縦七擒こ云ふ語が出たのだが、斯ふなるこ如何な負惜み屋も屁古垂れずには居られ無い、七度目に恐れ入つて仕舞つて「何うも孔明公は天威だ」こ云ふやうなここから南夷は心から漢の朝廷に服して仕舞つた、此時の孔明のやり方は甚だ迂なやうであるが其處が孔明の孔明たる處である、大体から云へば戦の目的は敵を屠り人を殺すを以て宜とするのでは無く相手を服せしむるにある、然も威力のみを以て服したやつは何時反旗を翻へさんこも計られぬが、徳を以て心から服せしめたものは中々そんなここは無い、孟獲の服したのも約まりは夫れである、一方に武力を持ち、一方に徳を以てしたのである。

十二月十九日

才は宜し 大なれ、小才は人に服せられ大才はよく人を服す……

(古 諺)

生嚙りこ云ふここは何んにつけても甚だ宜しく無い、生兵法は大疵の基こ云ふ俚諺もある通り、生嚙の癖に物識顔をすれば人から凹まされる憂がある、凹まされなくとも其場に譯の判つた人が居れば忽ち其薄識……博識ぢや無い……を見破られて鼻抓みの種にされるものだ、それこ同じく小才こ云ふやつは甚だ宜しく無いもので、遂には自分から人に救ひを求めてパンの種を有難く頂戴に及ばねはならぬここなる。

十二月二十日

罪を懺悔すれば心軽し……

(西 諺)

果の二十日こ云ふのは今日で、維新の頃までは牢獄に居つた罪人に對し、刑を

加へべきものは加へ、赦すべきものは赦し、夫れく、所断をした日だ云ふから特に此語を選んだ、語の意味は平易で判り易いだが、兎も角も罪を持つて隠して居るものゝ心中ほご不快なものはあるまい、薄の風にそよぐのを見ても氣を咎め、警官が何氣なく來かゝつたのを見て自分を逮捕に向つたものと思ひ違へて逃げ出したなぞの話はよく聞く處だ、今度の選挙法違反に就いての檢舉が峻烈を極めたについて、新代議士に翠丸を上げ下けて居つた連中も尠く無かつただらふ、尤も違反はせずとも運動者の方に萬一心得違ひをやつたものはあるまいかこの懸念からだが、併し罪も極り、判決もついで執行猶豫や罰金を申し渡されたものは「やれく」云ふやうなもので吃度氣も心も軽くなつて居るに相違は無い。

十二月二十一日

■落花枝に上り難く、破鏡重ねて照さず……………(五燈會言)

一旦口外したここは枝から落ちた花が再び枝につかぬやうなもので、最早取り返しが出来ない、信用を失つて仕舞つた後では再び盛り返そうとした處で破つた鏡のやうなものだ、何うしても元の通りにはならぬ、漸く形だけは調ふても破れ目を全然無くして仕舞ふ譯にはゆかぬ、序に云ふておく、破鏡の嘆云ふのは夫から離縁された女のこゝである。

十二月二十二日

■皆人の心の本はます鏡、みが、ばいかでくもりはつべ……………(室鳩巢)

此の歌の意味も解釋の仕方によつてはいろくゝなるこゝが出来ることが出来るが、最早時は年末だから其方によつて解釋を下すこゝ、昨今は何處へ行つても押迫つたゝで迎年の準備に多忙を極めて居るが、其内に「ア、仕方が無い、最早働いた所で十日も無いのだが、正月が来るのに新しい着物の一枚も出來ず、餅さへ搗け

ぬこは何んこ云ふ情け無いこことであらふ、自分は辛抱をしても家内や子供が承知をせん、殊に近所に餅を揚げて居るのに自分の内が搗かなんでは子供の心がヒガムだらふ、近所の子供等は正月に新しい曠衣を着て居るのに内の子供は古ほけだ綿入を着せておく譯にもなりかねる、斯んなこことなれば寧ろ正月が無ければよいに「なんかこ正月の來るのを怨めし氣に云ふて居る人も随分あるものだ、是れは正月を怨むより自分を怨むのは至當である、正月は毎年來るもので何も知つたこことでは無いが、自分が懶けたり怠つたりするから斯んな破目に墮るのだ、所謂磨かばいかで曇りはつべき筈の無い心の鏡を、磨かずに平日圖法螺をやつたり、無駄費ひをした結果此んな破目になるのである、常々から其心掛を以て一日に十錢づゝ残しておつても一ヶ年に積れば三拾六圓五拾錢ある道理だから、そんなこことを云ふくらいの家計なれば是れで餅も搗き、妻子の着物も買ふここと出来るだらふ。

十二月二十三日

■人事に潮汐あり、其満潮に乗すれば幸運に達す……(セキスピア)
 機會を捉へよ、機會を失するなこ云ふ意味である、早い話が昨年末賞與で懐中を暖くして居る人もあらふが、其金子で懐中が暖いからこ云ふので俄かにバツ／＼こ費つて仕舞つては一月早々目を剝かねばならぬこことなる、然も其賞與こ云ふのは毎月得られるものでは無く、半期／＼か或ひは來年の今頃にならぬこ手に入ら無いのこ同様、機會も來た時には盲く捉へて逃さぬやうにせねば、今度の時機が中々容易に來るものでは無い。

十二月二十四日

■苦しい時の神頼み……(俚 諺)
 人間の心は勝手なものである、順潮に乗じた時は神も佛も何處に居るか尻喰へこ云ふ有様だが、さてソロ／＼逆境に沈まふこするこ俄かに神信心を初めて無

精矢鱈に助け給へを云ふのは人情であるけれども何んな寛量な神佛も勝手な祈
を一々聞いて居るべき筈は無い、何うせ昨今は神祈りをやつて居る人が大分増
加したこゝろ思ふ、神を祈る間があれば心を誠實にしてセツセミ稼業に精を出
す方が正月の小使ひ錢でも儲けるこゝろ出来る。

十二月二十五日

疑はしきことあらば之れを問ふを耻づべからず、過ちたる事あ
らば之れを正さるゝを耻づべからず……………(エラスマス)

問ふは一度の耻、問はざるは末代の耻云ふこゝろがある、殊に疑はしき事は尙
更ら訊さねばならない、賣らぬ品物の請求を月末に持つて行つた處で誰れも其
金を拂ふものは無く、反つて「彼の店は附け掛をする」なんか信用を害する
こゝろなるから、疑はしいものは前以て充分に正しておかねばならない、假令
請求書に書き附けてあつても夫れを消して「是れは附け間違ひですから」云

ふて行けば先方に於ても咎めるこゝろは無く、又自分も疚しい處は無い。

十二月二十六日

一苦一樂相磨練し、練極まりて福を成すものは其福始めて久し
……………(菜根譚)

苦勞をせねば物事を語るに足らん云ふのは是れだ、世に幸福云ふこゝろはい
ろくゝあるけれども、偶然に得た幸福は實際の幸福は云はれない、實際の幸
福は世の中の甘いも辛いも括め盡した後に得たもので、夫れで無くは幸福
して長く楽しむこゝろは出来ぬ。

十二月二十七日

不用のものは一厘にても價高し……………(セネカ)
世に何が高價だ云ふて不用のもの……………云へば語弊があるが、贅澤物は高
價なもの無い。

十二月二十八日

■厭世は人を弱さに導き、樂天は人を力に導く（ワイリアム、セース）
 世を果敢なむ意氣が全く消沈する、意氣が銷沈すれば氣力がいよく弱くなつて、出來得ることも出來ぬやうになるが、氣をノンビリ持つて居るこゝ、心が愉快なものだから何事も面白く出來る、従つて行つた仕事に活氣のあるものだ
 十二月二十九日

■日中すれば則ち移り、月滿つれば則ち虧け、物盛んなれば則ち衰ふ……………（史記）
 太陽が中天に昇りつめれば次第に西に傾き、月が十五夜を過ぐれば次第に虧け人の運も頂上にのほりつめたなれば次第に衰へるものであるから氣をつけねばならない。
 十二月三十日

■一葉の落つるを見て歲の將に暮れんとするを知り、瓶中の氷を見て天下の寒さを知る……………（淮南子）

僅かな一葉でも其落ちるによつて季節を知るこゝが出來、一瓶の氷によつて世界の寒いのを知るこゝが出來る如く、微細のものでも氣を付けて居れば大きなこゝを側り知るこゝが出來るものである。

十二月三十一日

■始あるものは必ず終あり……………（揚子方言）
 生あるものは必ず死云ふこゝがあり、始あるものは必ず終無くてはならぬ、それに世間の人の多くは始あるを知つて終あるこゝを知らぬ譯ではあるまいが深く心に止めない、それだから大晦日が來た云ふので俄かに慌て出すが夫れでは何んにもならぬ、よりも一月一日の初頭に當つて大晦日のあるこゝを覺悟して居れば手の際によつて間誤付くこゝも無い譯である。

ことたれば
鳩翁
足るにまかせて事たらず
たらでことたる
身こそ安けれ

修養一ケ年終

大正四年九月十五日印刷
大正四年九月廿二日發行

【正價金五拾五錢】

著作者 岡田文祥堂編輯部

發行者 岡田 菊 二 郎
大阪市東區備後町五丁目八番屋敷

印刷者 堀 越 幸
大阪市西區阿波座二番町一番地

不許複製

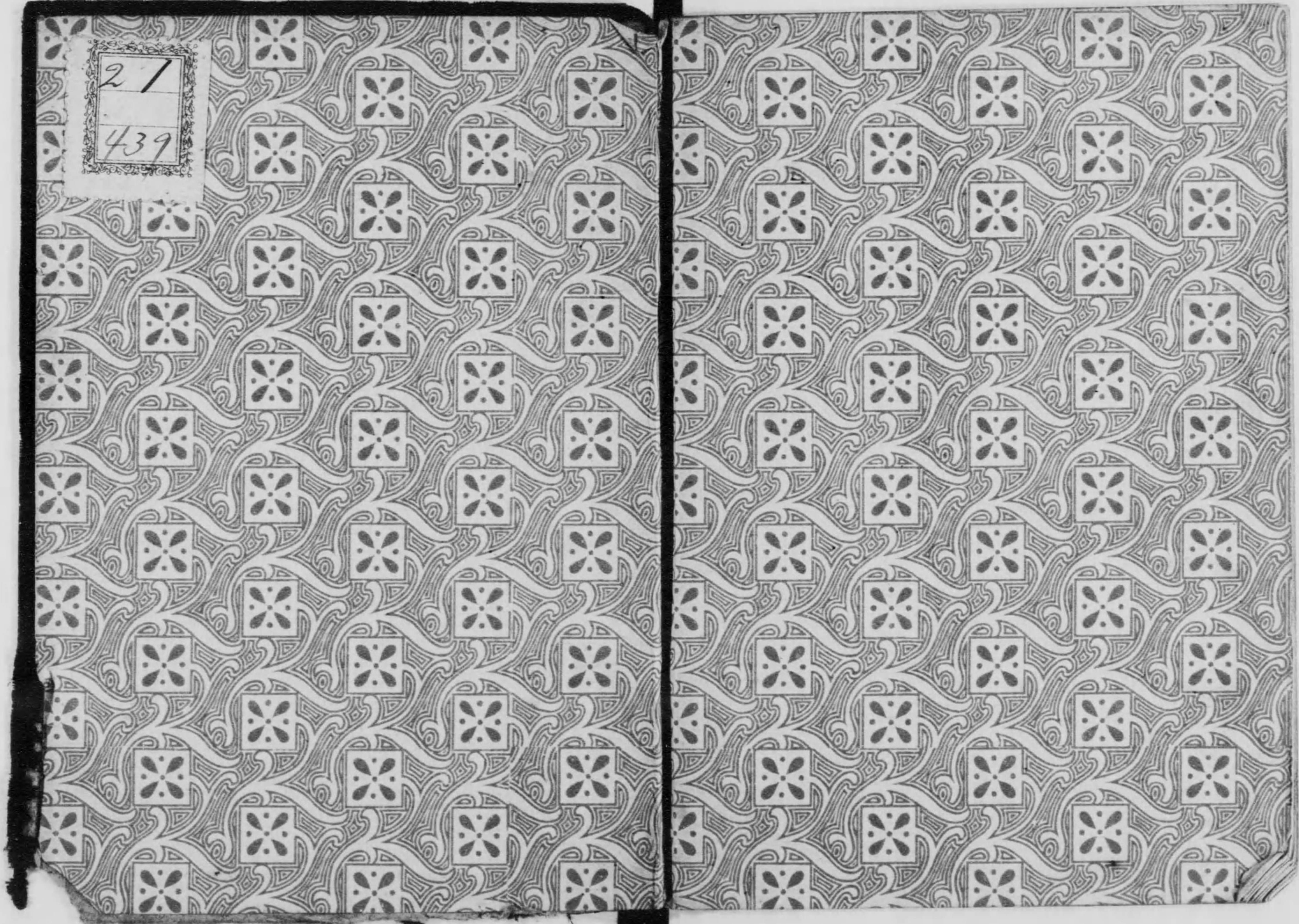
發賣所

大阪市東區備後町
御堂筋西入

岡田文祥堂

電話本局三二七六番
振替口座五二二八番

21
439



終

